
死のクリスマスイブ

けせら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死のクリスマスイブ

【Nコード】

N6197Z

【作者名】

けせら

【あらすじ】

十年前に世界各国の首脳が集まり「世界統一宣言」が出された。それにより世界から戦争がなくなり人々は平和に暮らすようになった。だが、戦争の皆無、医学の進歩のため人口の増加は世界の大問題となっていた。国々は宇宙コロニー計画、海上人工大陸計画など独自の計画によって人口問題をクリアしようとしていた。日本もまた独自の政策を打ち出した。「特権者優遇計画」だった。毎年クリスマスの時期に一週間、国が指定した特権者、特命者を指定し、特権者に特命者や市民を殺害させるものだった。クリスマス間近の日

曜、風間克行のもとに特権者指定の通知が届けられる。

死のクリスマスイブ・1

—

十二月 十日（日）

クリスマスまであと二週間と迫っている。

今年は週末と重なることもあってか、例年以上に街は盛り上がりを見せていた。気象庁の予報によると、ちょうど日曜のクリスマス・イブには雪が降るらしい。

街は十一月も半ばになると早々とクリスマスソングを流し、店先にはサンタクロースやクリスマスツリーを形取った商品が並び年末の一大商戦を繰り広げる。いまやクリスマスは正月以上に国民あがての一大行事となっていた。

風間克行はベッドのなか休日朝を、そして街の騒々しさを嫌気がさすほど十分に感じ取っていた。部屋は二時間も前から十分に暖まりベッドのなかには蒸し暑くさえ感じられるほどになっていた。そのベッドのなかで克行は毛布のなかに頭を突っ込み、光や音によって眠りを妨げられるのを避けようと試みていた。そうしておいて、しばらくの間暗闇のなかであくまでのんびりといろいろなことを考え巡らせた。

（今年の正月は田舎で過ごすことにしよう）

（ボーナスの残りで何を買おう）

（年賀状を早めに書いておかないと）

どうでもいいことを考えることで頭をゆっくりと目覚めさせるつもりだった。しかし、その暗闇のなかにまでジングルベルが侵入してきた。

克行の住むマンションは商店街に面しており、嫌でも街の様子は聞こえてくる。すでにジングルベルは克行が目覚めてから数えても

二十回は鳴り響いている。目覚めの音楽としては少々賑やかすぎる。克行にとってクリスマスなどはどうでもよかったし、マスコミやデパートに勝手に煽動されるのも嫌だった。子供の頃からサンタクロースが嫌いだった。おそらくそれは風邪をひいて病院に行った時、そこに置いてあった雑誌に載っていたマンガの影響だろう。そこには豊かな白い髭を生やし、真つ赤な服と帽子を被った体格の良いサンタクロースが左手にナイフを、右手にイバラの鞭を持って二タニタを気味の悪い笑みを浮かべている姿が描かれていた。そして、別のページにはそのイバラの鞭でトナカイの背を血が出るまで打っている姿があった。その夜、熱にうなされている彼の夢のなかにその姿が現れたことは言うまでもない。

まったく、どうしてあんなものばかりが毎年騒々しく鳴り響くん
だ？

克行はうんざりしながら毛布のなかから頭を出すとやっと目を開き時計を見つめた。

時計の針は十時を回っている。

約束は午後一時だ。十二時にここを出れば間に合うだろう。

五十嵐麻美から電話があったのは昨夜の三時過ぎで、克行はその時ちょうど眠りにつきそうになった時だった。彼女は相変わらず夜に強いところをしつかりと教えてくれた。

——ごめんね、私ったらいつもこの時間に目が覚めちゃって……明日休めるんでしょ。午後からでいいからいっしょに映画でも観に行こう。

（ひょっとするとあれは夢だったかな？）

もしそうだとしたらそれほど楽なことはない。しかも、ここ一週間の間、風邪で微熱が続いていて、やっと昨日になって熱がさがったばかりだ。麻美に会うのも三週間ぶりで克行も会いたい気持ちはあったが、今は少しでもゆつくりと休んでいたかった。

今年も終わりに近づき完全週休二日制も有名無実になっている。克行の務める会社は決して大きな会社ではない。どこにでもあるよ

うな中小企業で大きなメーカーなどからの依頼によって、システムの設計や開発を行うことを主としている。それでも年末になると決算を睨んだ会社の上司や、正月明けを見越した顧客の注文によりこの時期が一番忙しくなる。

克行は手を延ばすとテレビのリモコンのスイッチを押した。買ったばかりの大型のステレオテレビは部屋の狭さなど気にならないようにまだ半分眠っている克行に対し情報の提示を行い始めた。どことなく会社の上司に似ている年配のアナウンサーがニュースをぶつきらばうに読んでいる。

朝から会社を思い出すようなそのアナウンサーの顔に克行はほんの少し嫌悪感を持った。特にその上司とは常に気が合わずに何度言い合いをしたことだろう。そのたびに『いまにその頭を叩き割つてやるからな』と心のなかで密かに毒づくのだった。

それでも克行はチャンネルを変えようとはせずに、ぼんやりと目覚し替わりにそのつくったような声を聞いていた。

——次のニュースです。

突然、アナウンサーの声が重みを帯びたような気がして、克行はまだ少し眠い目を開けるとテレビに耳を傾けた。

——今年もまた「特権者優遇計画」が実施されることになり、先日、特権者が決定されました。特権者に関しては内密に特権者に内示される予定になっています。

では次のニュースです。

アナウンサーは早々にそのニュースを打ち切ると次のニュースへと話題を移した。

そうか……今年もやってくるのか。

克行は憂鬱な思いにかられた。

「特権者優遇計画」

それは五年前政府が発表した究極といえる人口制御政策であった。今や人工増加は深刻な問題となり、十年前に世界各首脳による「世界統一宣言」によって一切の戦争放棄が誓われるに至って、人口

の増加は誰の目にも人類最大の問題になっていった。各国はその問題に頭を悩まし、それぞれ独特の解決手段を取っていった。ロシアのコロナ計画、アメリカの海上人工大陸計画などが次々に発表されていった。日本も一時期は小子化によって人工が激減した時期があったが、養育費保護などの政策も影響し、今では再び人工は増加しつつあった。そんななか日本政府は一つの人口削減計画を打ち出した。それは毎年ある特定の一週間の間、国や県、市などが一定の特権者を指定し、指定された特権者は市が選び出したリストを中心に自由に六名を削除——つまりは殺害することを許可するというものだった。そのリストに載る人々は俗に「特命者」と呼ばれていた。その多くは百歳を越える老人や犯罪を犯した者で構成されていた。ただ、それはあくまで市が選定した候補リストであり、特命者リストに含まれない一般市民が、時折は特権者までが殺害されることもまれにあった。

全国で何名の特権者が選ばれるのか、また、何名の特命者、一般市民が殺害されるのか、それは一切伏せられていたがそれでもかなりの人口削減につながっていることから見て、その一週間の間、相当の数の殺人が行われていると見て相違なかった。

マスコミは政府の弾圧によりほとんどそのことに関し触れることは出来ず、国民のほとんどはその悪魔のような政策を身近に感じることはなかった。だが、克行のように偶然その殺人行為の現場に居合わせたことのある人も決して少なくはなかった。

（くそ、つまらないことを思い出してしまった）

克行は一瞬感じた不快の思いをすぐ断ち切るように、ベッドから抜け出ると窓辺に近づき、外の様子を見下ろした。

厚手のコートを着こんだ主婦や男たちが忙しげに行き交っているのが見える。ここ二、三年は暖冬が続き、地球の温暖化が例年以上に騒がれていたが今年の冬はオゾンホールも例年より狭く、珍しく寒さが厳しいらしい。環境対策がうまくいっているということだろうか。

克行はそつと窓を少しだけ開けた。天気は良く、暖かそうな日ざしが街を覆っているが、それでも肌を刺すような冷えた外の空気が暖まっている部屋の空気を犯すかのように飛びこんでくる。克行はその冷たさにすぐに窓を閉めた。

ピンポーン！

突然、玄関の呼び鈴の音が部屋のなかに響き渡った。

「はい！」

克行はパジャマ姿のまま玄関まで行くと、レンズから外をそつと覗いた。若い郵便屋が寒そうに足踏みしながら立っている。その帽子の下からはアルバイトであることを証明するように黄色に染めた髪がのぞいている。

克行はチェーンを外すとドアを開けた。

「書留です、印鑑お願いします」

郵便屋は無愛想なまま趣味の悪いうすい紫色の封筒を差し出した。克行が急いで印鑑を取ってきて差し出し出された書類に印鑑を押すと、郵便屋は何も言わないまま黙って次の配達へと早足に進んで行った。

克行はドアを閉めると鍵とチェーンをしっかりとかけてから部屋へ戻った。「世界統一宣言」以来、外国人が増えこの日本も欧米なみに治安が乱れてきている。特に麻薬が昼間でもあちこちで取り引きされるようになり、警察の手にもあまるようになってしまっている。ということがよくテレビでも取り沙汰されるようになってい。そして、それが一つの原因ともなり、強盗、空き巣などが多発しており、克行でなくてもこのくらいの用心は今では当然となっている。克行は部屋に戻ると改めてうすい紫色の封筒を眺めた。克行の想像どおりその封筒は市役所からのものだった。

（なんだろう……）

市役所など選挙の時以外はまるで関係のないと思っていた克行は

不思議な面持ちで開封した。なかにはたった一枚の白い通知だけが入っていた。

だが、その通知を読んでいくうち克行は自分の顔からずっと血の気がひいていくのを感じていた。

『風間克行様

このたびは誠におめでとうございます。

今年も再び「特権者優遇計画」が実施されることにあいなりまして。今年はみごとあなたが特権者として市の指定を受けることと決定し、取り急ぎ連絡させていただきます。

なお、詳しいことにつきましては十二月十一日（月曜）、市役所内にてご説明させていただきますのでお忙しいなか申し訳ありませんが、午前十時までに身分証明書、印鑑をお持ちのうえお越しくださいますようお願いいたします。

市長』

克行には一瞬それが、自分自身の死亡通知書のように思えた。

なぜ自分が特権者なんか選ばれたのかわからなかった。

克行はしばらく通知を手にしたままぼんやりと考え続けていた。治ったはずの風邪が振り返したように体がかつかと熱く、そして全身がだるく感じていた。今眠れば間違いなくイバラの鞭を持ったサントクロースに出会うことが出来るだろう。

これはあくまで噂だが「特権者」というのはかなり市や国にとって模範的な市民、国民と認められた人物でそのほとんどは公務員が多いとのことだった。

都内の小さなコンピュータ会社に務める若干二十六歳の克行が特権者を選ばれるなどこれまで夢にも思わなかった。

（それなのに、今年は俺が特権者として人を殺すことになる……）
もちろん、特権者というからにはあくまでも権利であって放棄す

ることが出来ることになっているという事は聞いていた。だが、その反面権利を放棄した者が、翌年は逆に特命者として選考されるという噂もまた克行は聞いたことがある。いずれにしてもそんな権利を望んでいる者は少ないはずだ。

テレビでは昨年からのアメリカの冷害によって米の供給量が需要を遥かに下回り、米価が以前国内だけでまかっていた頃の3倍にも跳ね上がるだろうというニュースをアナウンサーが深刻な顔で伝えていたが、今の克行にはそれはあまり重要なものには聞こえなかった。

（どうしたら……）

克行は麻美との約束の時間に遅れることにも気づかず、ただ呆然と立ちつくしていた。

死のクリスマスイブ・2

二

待ち合わせの時計台の下には、麻美だけでなく多くのカップルたちの姿を見ることが出来た。そのなかでも麻美は一際目をひく存在のように思われた。それともこれはその場に存在しているカップル全てがお互いをそう思っているのだろうか。

「どうしたのよ、あれほど遅れないように言っただでしょう」

麻美は三十分ほど遅れて待ち合わせの場所に現れた克行を見るなり怒ったようにふくれてみせた。丸い童顔に流行にとらわれないショートカットの髪、それに紺のコートが手伝い、とても二十四歳には見えない。以前にも学生と間違われたと言って喜んでいたこともあったほどだ。

五十嵐麻美とつき合うようになってからすでに二年がたとうとしていた。麻美は人材派遣センターに登録されており、克行がよく伺う顧客先に彼女が派遣されていたことをきっかけに知り合い、つき合うようになった。

麻美の全てを克行は愛していた。今では克行にとって最も大切な人ということが出来る。ただ一つ難点をあげるとすれば、それは麻美が飼っている猫のことかもしれない。どこから拾ってきたかわからないような黒猫のルシファー。決して猫が嫌いなわけではないが、あの野性を離れ人間に媚びて生き、それでいて人の顔を見るとベッドの下へ潜り込むような陰しさが克行には妙に気に入らなかった。あのルシファーの青い目を見るたびに心の奥底を覗かれるようなそんな不気味さがあった。

今、麻美のそばに当然ルシファーはいない。それでも気分はあまり良いとはいえなかった。麻美の顔を見れば心もなごむのではないかと思っていたが、心のなかに広がった暗雲はそう簡単に晴れては

くねなかった。

「ごめん……」

軽い鬱病にかかってしまったかのように、克行は暗い顔で頭をさげた。特権者優遇計画のことが頭から離れない。

「どうしたの？」

麻美はその克行の様子に、心配そうに克行の顔を覗き込んだ。

「い、いや……」

克行は麻美に特権者に指定されたことを隠すつもりだった。なぜだか、そのことが麻美に知られれば二人の仲が終わるようなそんな気がしたからだ。

「でも顔色が悪いわ。風邪、治ったんじゃないの？」

「大丈夫だよ。さあ、行こう。映画に遅れるだろう」

すると麻美は――

「あ、実はそれ嘘なの。本当は三時半から。きつと克行のことだから遅れてくると思って早めの時間を伝えといたの。だから本当はまだちよっぴり時間があるの」

そう言っただけで克行のジャケットの袖をそつと摘んで、いたずらつ子のような笑みを浮かべた。

「酷いな。そんなに遅れちゃいないだろう。時間までどうするんだ？」

「どこか喫茶店で休んでいきましょう。そうすればちよっぴいね。克行もそのほうがいいでしょ？ 映画までは元気になって、ちゃんと観られるようになってね」

麻美は克行の体にもたれかかると、克行を引っ張るようにして歩き出した。克行はそんな麻美を見つめながら、自分が特権者に指定されたことを麻美が知ったらどう思うだろうとしきりに考え続けた。

そんな克行の元気がない様子に、麻美は口にくそ出さないものの密かに不安なものを感じているようだった。

二人は麻美の言うとおりに喫茶店で少しの間時間をつぶすと映画

館へと足を運んだ。最近、仕事のほうがあまりに急がしすぎて好きな映画を観ることもなかったので、克行にとつては映画館に足を運ぶのも久しぶりだった。だが、映画を観ながらも、どうしても克行は今朝の通知のことを忘れることが出来なかった。スクリーンと自分の間に常にあの白い用紙に印刷された文字がちらついて見える気がした。

『——今年はみごとあなたが特権者として——』

そんなもの俺は望んじやいない。

映画を観ている間中、克行はこれから自分がどうなってしまうのだろうという不安に取りつかれていた。

「克行、どうしちゃったの？ やっぱりなんだか今日はいつもと様子が違うわ。何かあったの？」

映画が終わったあと入ったレストランで、麻美はまじまじと克行の顔を見つめた。すでに六時を過ぎ、外は暗くクリスマスシーズンにだけ光る街路樹に付けられたイルミネーションが美しく街を彩っている。

「そうかな……べつに何もないよ。最近忙しかったからちょっと疲れてるだけさ」

克行は麻美が不思議がるのを避けるようにつぶやくと食後のコーヒーに手をのばした。実際に自分の今日の態度がいつもと違っていることは克行も気がついていていた。けれど、それを隠そうにも今の克行には隠しきれなかった。それほどまでにあの通知は克行の心をしめていたのだった。

（どうしてあんな一枚の通知のために俺はこんなに苦しまなきゃいけないんだ！）

不安で微かに苛立っていた。

「それならいいけど……仕事そんなに忙しいの？ 来週はともかく、再来週はちゃんと予定空けといってね。仕事で会えないなんてこと言わないでね」

克行の心を解きほぐすそうとするかのように麻美はしきりに冗談

めいた口調で喋り笑顔をみせる。

「再来週？ 何かあったつけ？」

「やあね。冗談のつもり？」

「え？」

「クリスマスじゃないの」

美しい夢を見る少女のような口ぶりで麻美はつぶやいた。けれど、そのつぶやきさえも克行の耳には恐ろしい呪文のように聞こえ思わずグクリとした。その日こそが「特権者優遇計画」のメインともいえるフィナーレとなるのだ。人々はクリスマスの華やかさに心を奪われ「特権者優遇計画」などのことなどまったく忘れ去り、そして知らず知らずに何人もの特命者たちが凶弾に倒れることになる。

まるで――

（鼠取り！）

このクリスマスのきらびやかな光が餌になるわけだ。今更ながらにクリスマスを利用する国のやり方に腹がたった。

「そうだね。もうすぐクリスマスなんだね」

弱々しく呟く克行を不思議そうに麻美は見つめた。

「どうしたの？ 本当に今日は変よ。クリスマスに嫌なことでもあるの？」

「いや、そうじゃないけど。ただ、今日部屋を出るときにちょっと嫌なニュースを見たんだ」

「嫌なニュース？」

「特権者優遇計画さ」

さりげなく言った克行の言葉に、さすがに麻美も少し表情を曇らせた。

「そう……そうね、もうすぐその季節だったわね」

特権者優遇計画のことを知らない者は世の中に誰一人としていないだろう。だが、誰もが極力口に出さないようにつとめているし、実際にはその当日まではほとんどの人たちが忘れてしまっている。また、もし口に出すことがあったとしても、単なる話題の一つとし

て喋るだけで、決してそれに対しての不平不満を語ろうとはしない。いつどこで誰がその話を聞いているか、そしてまたいつどこで自分が特命者リストに載るか分からない。そんな恐怖が知らず知らずのうちに心を支配しているのだ。克行も麻美も昨年まではそんな中の一人に過ぎなかった。

「何人くらいが対象になるんだろうな」

克行の何気ない言葉に麻美はびくりと体を震わせた。克行自身その言葉が特権者に対するものなのか、それとも特命者へのものなのかわからなかった。

「やめてよ、怖くなっちゃうじゃない」

そう言った麻美の顔が克行には少し青ざめているように見えた。

無理に笑顔をつくろうとする麻美が愛らしく見えた。

克行はそんな麻美の顔を見つめながら、ふとつぶやいた。

「もし僕が特権者に選ばれたとしたら……どうする？」

言ってしまうのか？ 言っても少しでも心の重みもとってしまいたい。克行の心の中にそんな衝動が走った。

「克行が？」

麻美は驚いたような目で克行の目をじっと見つめた。その目はひどく怯えていた。コーヒーに砂糖をいれようとする彼女の手がぴたりと止まった。

「例えばの話だよ」

「例えば？」

「そうさ、実際にそんなことあるわけないだろう」

麻美の怯えたような態度に克行は真実を語るのを避けた。あえて麻美に伝える必要はない。ほんの一週間のことだ。麻美を不安にさせる必要などない。何とか自分一人で全てを解決してみせる。

「やだ、そんな冗談言わないでよ。そんな話しても仕方ないわ。またいつもみたいに知らないうちに過ぎてゆくわよ。もうやめましょう、その話は」

麻美は再び笑顔をつくると話題を別のほうへもっていった。

（俺だってそう思いたい。だけど、今年だけは去年までのようには
いかないんだ）

克行は麻美の話に耳を傾けながらも心はいつまでも離れることが
出来ないでいた。

死のクリスマスイブ・3

三

十二月 十一日 (月)

「あなたたちは非常に大きな任務を与えられたのです!」

市長は特別会議室の演壇に立ち、大きな体を震わせながら演説を続けている。暖房がやけに効いているせいか市長は体中から汗をふきだし、それはまるで鯨が潮を吹いているように見えた。

克行はそんな市長の姿を眺めながら、子供の頃に深夜のテレビで観た「白鯨」という映画を思い出していた。

特別会議室には内側からしつかりと鍵がかけられ、市の関係者と特権者以外は出入りが許されないようにされている。学校の教室程度の特別会議室のなかには克行を含めて、三十名ほどの特権者が長机を前に座っている。ただし、実際にはここ以外の場所でも同じような説明会がされており、全ての特権者がここにいるとは限っていないかった。ほとんどの者がその市長のつまらない演説にあきあきしたような顔をしながら市長の演説が終わるのをじっと待っていた。

克行はこれが終わりしだいに会社へ行くつもりで、いつものようにベージュのスーツを着て出席していた。もちろん会社へは遅れる本当の理由を伝えてはいない。体調がすぐれないため、病院に寄ってから出社すると既に連絡済だ。

「この政策はこの日本を、そして世界を救済するために設けられたものです。つまり、あなたたちは世界を救済する者として選ばれたのです!」

ヤニで黄色くなったような歯を剥き出しにしながら、市長のお世辞にもうまいとはいえない演説は続いた。

(よくこれで選挙に通ったものだ)

克行は冷やかな目で市長の姿を眺めていた。多少の緊張感はあるが、不思議とそれほどコチコチになるほどではなかったし、昨日通知をもらった時ほどの不安も感じてはいなかった。特権者といってもしょせんただの権利に過ぎない。権利を放棄することで翌年すぐに特命者にされるというのも、根も葉もない噂かもしれない。克行はなるべく楽観的な考え方をするように務めた。ただ、市長の演説を聞いているうちに体のネジがきしんでくるような感覚に襲われていた。そこで、克行は出来るかぎり市長の声を聞かないように心がけながらそつと他の特権者たちを盗み見た。

スーツ姿の四十過ぎのサラリーマン、まだ大学生らしい若者、いったいどんな方法で選んだのだろうと思うほどさまざまな人々が集まっている。

みんな、どんな思いでここに集まっているのだろうと克行は思いめぐらせた。だが、どんな思いであろうとここに集まった者たちはみな、殺人者となる可能性を持っていることだけは確かだ。もちろんそれは合法的なものとしても、それでも人を殺すという行為に違いはない。

ここにいる人たちは皆本当に人を殺すことになるのだろうか。

窓際の前の席に座っている若者が市長の演説に抗議するつもりなのかあからさまにあくびをした。だが、市長はいつこうに臆した素振りもみせず、淡々と演説を続けている。その市長の態度に以前聞いた噂を思い出していた。

——あの市長はずうずうしさだけで選挙に当選したのさ。あいつが市長になりたい一番の訳は特権者優遇計画を自分の思いのままに操りたいからなんだ。それにな、ここだけの話だが特権者の数は国から指定されることになってるんだ。けど、毎年決まって市から指定される特権者はそれよりも一人少なくなってる。なぜかわかるか？つまり、あの市長が自ら特権者になるってことだ。

（なるほど……）

克行は改めて市長を観察した。あの時はまさかと思ったが、この

市長ならばありえる話だ、と克行は市長の狂喜とも言える熱意のある演説を聞き思った。

「この世界を救って下さい！ 人々を救って下さい！ それが出来るのはあなたたちだけなのです！」

突然、市長の叫び声とともに演説が終了した。誰一人として拍手をしようとはしなかったし、市長もまたそれを期待しているようではなかった。

市長が満足そうに演台から下りると、すぐに傍らで待機していた市職員の一人が入れ代わった。

「では、これより「特権者優遇計画」を実施するにおいて、規則、注意等について説明をさせていただきます」

牛乳瓶の蓋のような分厚い銀斑の眼鏡をかけた職員は、そう言うてから一度特権者たちをぐるりと見渡した。気のせいかなその目は克行のところではほんの一瞬だけ止まったように思えた。その姿は一種独特な不気味な雰囲気を持っていた。

「まず、みなさんがたの席の前に置かれた封筒を開けて下さい」

市職員の指示に従い特権者たちは自分の前にある封筒に手をかける。

克行もみんなに習い封筒を手にとった。封筒の膨らみで封筒の中身は想像がついていた。紙包みでくるまれた拳銃がそのなかから姿を現す。実際に取り出してみるとそのずしりとくる感触が妙に生々しい。もちろん拳銃を手にするのは初めてのことだ。

「みなさんが手にしているのは今年使用されることになったK-9-6Mという型の拳銃です。これは毎年、ある限定された数だけ国によってこの特権者優遇計画のために作成されたもので、これにあって弾丸も支給されるものはありません。以前にも特権者として登録され弾丸を残されているかたもいるかと思いますがそれらは使用出来ませんのでご注意ください。弾丸は後ほどみなさんが退出する時に各々六発ずつ支給します」

まるでテレビショッピングのコマーシャルでもするようにあっさ

りと市職員は説明し続けた。

「この拳銃ですが、これは実に簡単な操作で実に正確かつ十分なほどの威力があります」

そう言うのと職員は突然、サンプル用の拳銃を構えたと部屋の隅に用意された人形の頭めがけ引き鉄を弾いた。弾けるような火薬の音と共に弾丸が放たれ、人形の頭を吹き飛ばした。その爆音に特権者たちの何人かがびくりと肩をすばめた。

「実際にはこのように人の頭を吹き飛ばすほどの威力はありませんが、それでも殺傷能力は十分にあります」

（つまりそれだけ簡単に人が殺せるということだろう）

克行は心のなかでそう罵った。

「次に規則について説明します。封筒のなかにさらにもう一つ黄色い封筒がありますので出して下さい。ありましたか？それが今年みなさんに配布される「特命者リスト」です。決して他の人には見せないようにして下さい」

さすがに手が震えた。自分の手のなかに、これから最優先で殺される人々の名簿があるのだ。

「特命者は一人につき、およそ五人の特権者のリストに名前を載せられています。同一の特命者に対して五人の特権者ということで行時にダブルではないかと危惧されるかと思いますが、一人の特権者のリストには三十人の特命者が名前を連ねているのですから、そうそうダブルことはありません。もし、自分のリストに載っている特命者が無事、この世から削除されましたら皆さんのリストでもこまめに削除して余計な手間のかかるようなことを避けるようにして下さい。なお、これは言わずとしたことですが、このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしも、それを破った時にはその人にはしかるべきペナルティが与えられることになります。厳重に注意して下さい。また、その他の規則についてですが――」

市職員はさらに続けた。だが、克行の頭のなかにはさらなる規則の説明よりも、特命者リストのことが頭にひっかかっていた。特権

者のほとんどはすでに封を開け、なかのリストを取り出して見ている。なかには何が楽しいのか笑みを浮かべている者さえいる。

克行は封筒を手にすると思いきって中のリストを取り出した。ざらざらとしたあまり良質とはいえない白い紙に印刷された名前が縦に並んでいる。克行はその名前の列を読みながら、自分の顔から血の気がひいていくを感じた。

（なぜこんな……こんなことって……どうなってるんだ！）

今にも叫び出したいようなそんな苛立ちにも似た恐怖感が克行を襲った。まるで自分一人だけが群れから取り残され、どこか遠い世界に消え去ってしまうようなそんな感触に包まれているような気がしていた。

克行は震える手で必死にリストを押さえながら回りの特権者たちの行動を見回し、それからもう一度視線をリストへ向けた。

そこに書いてある名前の半数は、克行の見知った者たちだった。会社の同僚、近所の老人、そして……そして何よりもシヨックだったのはそこに恋人である五十嵐麻美の名前があったことだった。

楽観的に考えようとしていた気持ちなど遠くへふつとんでしまい、代わりに大きな恐怖が押し寄せていた。全身の毛穴から汗が吹き出している感じがした。

克行はその欄を何度も何度も見直した。ひょっとしたら見間違いないかなと思い、同姓同名の別人であることを祈った。しかし、そこに書いてある名前に間違いはなく、住所、そして職業ともに麻美本人と認めるほかなかった。

（なぜ……なぜ麻美がリストのなかに……なぜだ？）

克行は運命を呪った。自分の手のなかに恋人の命がある。しかし、もつと恐ろしいのは麻美の名前の入ったリストをあと少なくとも四人の特権者が握っているということだ。もし、克行のリストにだけ載せられているのなら麻美に危険はない。だが、克行以外にも四人の特権者が麻美を狙うことになる……。しかも、麻美の名前の載ったリストを持っているのが今ここに集まっている者たちだけとは

限らない。特命者リストはあくまでも政府からの依頼でしかなく、特権者には実際には対象を自由に選ぶことが出来るのだ。

（どうしたら……俺はいつたいどうしたらいいんだ……）

克行の頭のなかに麻美の姿がちらついた。麻美の愛らしい笑顔、あの笑顔がこの世から消える……。そう思うたびに克行の心はかきむしられるような苦しみに襲われた。

「あんた、大丈夫かい？」

隣に座っていた三十過ぎの男が克行の顔を覗き込んだ。だが、その顔は決して心から克行のことを心配してはいない。ただの興味本位でしかないことはすぐにわかった。克行は慌ててリストを封筒のなかに突っ込んだ。

「い……いえ……」

「あんた、今年が初めてなんだろう」

男はにやりと笑って言った。その男の落ち着いた素振りに克行は不思議そうに男を観察した。

黒いダブルのスーツに黒のネクタイ、まるで葬式に行くときのような格好だ。

「俺は立花勇作ってんだ。よろしくな」

男は名乗って左手を差し出した。

「え？」

「えっじゃないよ、ただ名乗ってるだけだ。別に特権者同士が名乗りあっちゃいけないって規則はないだろ。さあ、握手だ」

立花は克行の手を取ると無造作に握手した。それは握手というよりも一方的に克行の手を振り回しているというほうが近かった。

「で、あんたは？」

「風間です。なぜ僕が初めてだとわかったんですか？」

「そんなの一目でわかるさ。そんな拳銃おもちゃを握って震えてるなんて、初めてに決まってるじゃないか」

「あなたは何回目なんですか？」

「俺かい？ 俺は三度目さ」

立花は自慢げに答えた。

「そうですか、それじゃ拳銃のほうも慣れてるんですか？」

「慣れてるよ。けど、俺はもともとそういう仕事なんでね。慣れるのが当然なんだ」

「仕事？」

「警察官なんだ」

「警察官？」

克行はどきりとして立花を見返した。人々の治安を守るべき警察官が殺人者の予備軍として克行の目の前に座っている。そのことに克行は不気味な感じを抱いた。

「変かい？ 警察官が人を殺すのは。だが、特権者優遇計画ってのは別にどんな仕事をしていようがそれなりの資格がありやあ特権者になってもいいものなんだぜ。警察官だろうが医者だろうが、それこそ政治家だろうが……」

立花はヒヒヒと薄きみ悪く笑うとじろりと辺りを見回した。「見なよ、現にあつちのは医者だぜ。それにあつちのは学校の教師とくらあ」

立花は一人一人克行に説明していく。克行もそれに合わせて一人一人顔をじっくりと眺めていった。やけに神経質そうな者もいれば、自分の置かれた立場など気にも止めていないような態度でぼんやりと窓の外を眺めている者もいた。だが、ここに集められた特権者たちはどこか、一種独特な雰囲気を持っているように克行は感じた。（このなかに麻美の名前の入ったリストを持っている者がいるかもしれない。ひよつとするとこの男が……）

克行は思いをめぐらせ、一人一人の顔をしっかりと覚え込むように心がけた。

「どうだい、こうやって見てるとなかなか面白いだろう。俺なんかここに来るだけでもう嬉しくなっちゃう」

「嬉しい？」

「そうさ。なんといつても天下御免で人を殺すことが出来るんだぜ。

そんな楽しいことはないじゃないか。それに人間、死を間近にすると心が表に出るのさ。普段見ることの出来ない人間の浅ましさがつくり眺めることが出来る。こいつぁ、どんな芝居よりも面白いぜ。赤の他人が死ぬのにどうして躊躇する必要がある？」

「けど、特命者リストには――」

「特命者リストには自分の知らない人間しか載っていない。もちろんリスト以外の人間を殺すのも特権者の自由だがね」

克行は立花の言葉に一瞬啞然とした。

「それ、本当ですか？」

「何が？」

「本当に知らない人の名前しか載らないことになってるんですか？」

「そりゃそうさ。いくら何でも顔見知りの名前は載ってないだろう。そんなことをしたらさすがに殺しをためらう奴も出てくる。もちろん俺は別だがね。なんだ？ あんたのリストには知り合いの名前でもあるのかい？」

「……い、いえ」

克行は口ごもりながらも答えた。自分のリストだけがなぜ他の特権者たちと違うのかそれはわからない。だが、この男に克行の置かれた立場を知られたくはなかった。

「なら問題はない。一人くらい顔見知りが入っていたところで三十人のうちの一人だ。気にすることなんかない。もし、他に殺したい奴がいるなら別にリストに載ってなくなつて構わない。殺つちまえばいい。ただ、そうなると来年は特権者になりそこなうかもしれないがね」

立花の言葉はまるで市の圧力そのものに感じられた。克行は言葉を返すことも出来ず汗ばんだ手でリストを握りしめていた。

死のクリスマスイブ・4

四

全ての説明が終わったのは十一時を少し回った頃だった。市長の演説分だろうか、予定よりもほんのわずかながらオーバーしている。特権者たちは皆それぞれ茶色の封筒を片手に市役所を後にした。

克行は足取りも重く、ゆっくりと会議室を出た。誰かにリストのことを問いただしたかった。だが、そんなことが出来るはずもないし、聞くことも怖かった。

（「だから何の問題があるというんです？ あなたは特権者でこの女は特命者選ばれた。あなたはこの女を殺さなければいけないんです！」）

もしそんなことになったら……。

会議室から市役所のロビーまでは十六段からなる階段四つと二十メートルたらずの廊下でつながっている。そのあちらこちらに大理石のテーブルが置かれ、その上に花が飾られている。

（何て嫌味な……）

克行はその花全てをひっくり返して歩きたい衝動に刈られた。花は今日に限ってか全て真っ赤なバラで統一され、その色は克行にどす黒い血の色を連想させた。

克行はなるべくその花から視線を逸らしながら、とぼとぼと出口の方向へと歩いて行った。頭の中は今カバンのなかに入っているリストのことについてになっている。ふと、どこからか誰かを呼ぶ声が聞こえてきたような気がした。だが、そんなことなど今の克行にはどうでもいいことに思えた。

「克行！」

声はもう一度克行の耳に届き、克行もやっとそれが自分と呼ぶ声だということに気づいた。振り返るとベージュのスーツを着た若い

女性が走り寄ってくるのが見えた。その姿に克行は思わず驚きの声をあげた。

「涼子……」

三浦涼子とは大学時代に一度つき合っていたことがあったが、卒業以来一度も会っていなかった。

「久しぶりね」

涼子は軽快な足取りで走り寄ると懐かしげな視線を克行に向けた。長い髪がさらりと肩口で揺れている。

「どうしてこんなところにいるの？」

克行は涼子を見つめて言った。初めて見る涼子のスーツ姿がやけに大人っぽく感じられた。

「働いてるのよ」

「働いてる？　ここで？」

克行は驚いて涼子を見つめた。涼子はもつと野心家だったはずだ。役所で事務員をやっているということは涼子には似合わないように思えた。

「そうよ。私らしくないかしら」

克行の心を読んだかのように涼子はクスリと微笑んだ。「それよりも克行こそどうしてこんなところにいるの？」

「……」

克行は何と言っているかわからず目をキョロキョロさせた。その克行の様子にさすがに涼子も気づいたようだった。

「まさか……克行が……？」

「ああ……」

克行はなるべく涼子の目を見ないようにして頷いた。涼子もまた市の職員だということが克行の心を暗くしていた。涼子もまた、そんな克行の心中を察したのか言葉を選ぶかのように視線を動かして誰にも見られていないことを確認するように周囲を見回した。それから、思いついたように克行の目を見据えると言った。

「ねえ、克行、今時間ある？」

「時間？」

「うん、ちょっとつき合つて欲しいの。どっかでコーヒーでも飲みながら話でもしない。克行と会うのも久しぶりだしね」

その言葉の裏に克行は涼子が何を話そうとしているのかすぐにわかった。

「いいよ、少しくらいなら。おまえのほうはいいのか？　まだ仕事じゃないのか」

「もう十一時を回つてゐるわ。もうすぐお昼じゃない。どうせお役所仕事だからさほど忙しくもないし、それに他の仕事と違って仕事に期限がないようなものよ」

涼子はそう言つて笑つた。その笑顔に克行は彼女の暖かい心づかいを見てとれた。

克行と涼子の二人はそのまま市役所を出ると少し市役所から離れた喫茶店に入った。市役所の近くの店には入りたくないと言子がい、克行もまた同じように思つたからだ。ただ、その涼子の言動は克行にはひどく危険なように見えた。

涼子はそこでコーヒーとサンドイッチを、克行はコーヒーだけを頼んだ。まださっきのことが頭にこびりついていて、とても食事をする気にはならなかった。

「それにしても本当に久しぶりね」

涼子は改めて克行の顔をじつと見つめ直した。その潤んだ瞳はつき合つていた頃とまったく変わつていない。それだけに克行はその涼子の眼差しがつかく感じられた。涼子と別れたのは彼女のことを嫌いになつたためではなかった。ただ、まだ若かつた克行にとって涼子のひたむきな愛が重荷に感じられたのだ。

「……うん」

「それで？」

克行の思いを察したかのように涼子はすぐに話題を変えた。

「……うん」

どう話していいものか克行は迷つた。

「特権者に選ばれたんでしょ」

「先週通知が届いたんだ」

「どうして克行が選ばれたんだろう」

涼子はまじまじと克行を眺めた。

「俺にもさっぱりわからない。確かに俺は刑事事件を起こしたわけでもないし、市や国に反することをやってるわけじゃない。でも、別段模範市民ってこともないと思うんだが――」

「そうね。本来なら――というより、去年、私が委員をやった時なら克行は決して特権者になんか選ばれる立場じゃなかったと思うんだけど」

「委員をやってた？」

「そうよ、去年だけだけどね。ちょっとしたお手伝いみたいなものよ」

軽く笑って答える涼子の様子に克行は時間の流れをひしひしと感じた。

「それじゃ選定方法が変わったのか？」

「さあ……」

涼子は一つサンドイッチを取り上げ口に運んだ。

「おまえはどうして今年は特権者計画実行委員にならなかったんだ？」

「つまらないのよね……」

「つまらない？」

「そう、私は国の中枢で働きたかったの。いろいろ手を回したんだけど駄目だったの。だから仕方なく市役所に入ったんだけど。特権者優遇計画って国からの指示によるものですよ。うまくいけばどこかの国家機関に入れるんじゃないかと思って志願したの。でもやってみたら全然そんなチャンスもなかったわけ」

「それじゃ辞めればいいじゃないか」

克行はインスタントじゃないかと思えるほど粉っぽいコーヒーを口にしてから言った。すると涼子はいとも簡単に答えた。

「うん、私も今それを考えてる」

あまりに簡単な返事に克行は驚きの目を涼子に向けた。

「本当か？」

「本当、もうほとほとあんな市役所なんか嫌になっちゃった。別に仕事が嫌いなわけじゃないの。仕事は楽だし給料だって悪くない。ただ上司とうまういかなきゃ先だって見えてるようなもんでしょ」

「そう……」

「でも辞めるって決めたら楽になっちゃった。やっと私も自由になれるわ。ただ——」

涼子は突然表情を厳しくした。

「ただ——」

「心残りが一つ出来たわ」

「出来た？」

「克行のこと」

「俺の？」

「克行が特権者に選ばれるなんて……まったく思いもしなかった」

「そんなおまえが心配するようなことじゃない。いくら特権者に選ばれたからって何もその権利を絶対に使用する必要はないんだ。特命者にならないだけ良かったんだ」

克行は自分の心のなかにある不安すらも吹き飛ばすよう、わざと明るく振舞おうと試みた。だが、涼子はいつこうに表情を崩そうとはしない。それどころかますます表情を固くする。

「本当にそう思っているの？ 本当にそれで済むと思っているの？」

「どういうことだ？」

「克行が特権者に選ばれるなんてどこか間違ってる。今年の特権者優遇計画は去年とはまるで違う」

涼子の目は真剣そのものでさっきまでの表情とはまるで違っていい。克行は突然、思いもしない恐怖にさらされているような気持ちになった。

「それじゃ、おまえは俺が特権者に選ばれたのはどんな意味がある

って言うんだ？」

克行は声を潜めて尋ねた。「特権者」という言葉を発するたびに自分自身に何か悪いことが起きるような気がしたし、さらに店のウェイトレスや客に聞かれたくなかった。

「それがわからないのよ。だからこそかえって不安になる。そもそも「特権者優遇計画」なんてものは間違った政策よ。それが毎年のように行われる。しかも国民のほとんどが知っているようでまるで知っていない。そんなものの裏にまともなものが潜んでいるわけないでしょう。それに私がそう思うのはもう一つ理由があるの。実はこれは噂なんだけど、特権者優遇計画の上でクーデターみたいなことが起きたらしいの。もしかしたらそれが影響しているのかもしれないわね」

確かに涼子の言う通りかもしれない。克行は特権者に選定される通知をもらってから得体の知れない不安にかられていたが、涼子の言葉を聞きその不安の姿が一部見えたような気がした。

「これを見てくれないか」

克行は涼子に全てを打ち明けようと思い、今日手渡された書類をテーブルに出した。

「これって特命者リストじゃないの」

「そうだ、こいつは俺が受け取ったリストだ。よく中を見てくれ。俺は今日同じ特権者に選ばれた男から少し特命者について聞いた。その男が言うには特命者というのは特権者にとってまったくの第三者的な人間が選定されていると言うんだ。つまり知り合いがリストのなかにいるはずがないって」

「その通りよ。まったく知らない人間ばかりというわけじゃないかもしれないけど、それでも直接的な知り合いと思われる人間はリストのなかには入れないことになってるわ」

「ところが、俺のリストのなかに入っている特命者の半数ほどは俺の直接的な知り合いなんだ」

「何ですって？」

思わず涼子が驚きの声をあげ、その声に店にいた人々の視線を集める事になった。涼子はすぐに声のトーンを低くして喋り始めた。

「知り合いが？ そんなはずないわ。有り得ない」

「本当なんだ。その有り得ないことが、俺のリストのなかには起こってるんだ。同姓同名ってことも一瞬考えた。だが、全員調べたわけじゃないが住所や職業、電話番号、どれを見てもそれは俺の知っている人なんだ」

克行の心のなかに麻美の姿があった。自分の持つ特命者リストのなかに麻美が入っている。そんな悪夢のような出来事から早く逃れたかった。

「……やっぱり何か間違ってる」

涼子の目がぼんやりと遠くを見つめるようになっていた。

「涼子？」

「いいわ」

突然思い起こしたように涼子の視線は克行を捕らえた。

「どうしたんだ？」

「三日だけ待ってちょうだい。その間に私が調べてみる」

「調べる？」

「ええ、おそらく今年も特権者優遇計画に関する資料は、パスワードくらい変わっていても去年と同じディスクに入っていると思うわ。調べるくらいわからないわ」

「だけど、おまえ今年は実行委員からはずされただろう。そんなことしても大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。少しくらいディスクのなかを見たってバレやしないわよ。それにバレたところで何てことないわ。どうせ市長に恨まれたところで特命者リストに加えられるだけじゃない」

冗談交じりに涼子は言った。克行は驚きの目で涼子を見た。しかし、涼子のほうはまったく動じることなくニッコリ笑うとおもむろにバッグを開いて中を見せた。バッグの奥に何か黒い金属の固まりが見えた。

「それ……」

「スタンガン、FBC2X、克行も名前くらい知ってるでしょう」
克行もそのスタンガンのことだけは知っていた。見たことはないが聞いたことはある。三年も前に売り出されたものだが、売り出されてすぐにある事件にこのスタンガンの名前が出たことがある。事件そのものはどこにでもある婦女暴行事件だった。深夜、帰宅途中のOLが近所の大学生に襲われそうになったというものだった。だが、結末は他のものとは違っていた。襲われそうになった女性がこのスタンガンを持ち歩いていたのだ。スタンガンは通常のものよりも三倍もの電流が流れるようになっており、さらにその電流の発せられる部分はバネ仕掛けで目標に向かって十メートルは飛ぶようになっていた。あいにく夏の暑い時期で大学生はTシャツ一枚という姿だった。その裸同然の心臓部分にスタンガンは噛みつき、一気に電流を放電したのだ。大学生は一瞬のうちに硬直状態になり、騒ぎに駆けつけた住人によって救急車で運ばれたがそのまま目覚めることはなかった。あまりにも強力なそのスタンガンはその事件で社会的な問題にもなったが、その反面女性の強力な味方として人気を得ることになった。結局、スタンガンは改良され通常のもの二倍程度の電流に押さえられることになった。

今、涼子の持っているものは改良後のものではなく、旧式のもののように克行には見受けられた。

「おまえ、いつもそんなもの持ち歩いてるのか？」

「いつもじゃないわ。特権者優遇計画を実施期間中だけ、職員には皆これが配られることになっているの」

「何のために？」

「市で選んだ特権者に逆に命を狙われないためよ。私もまだこんなもの使ったことはないけど。いくら何でもこいつを使うことにはならないでしょう」

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫、そうすれば克行がなぜ特権者に選ばれたのか調べられる」

「それならもう一人調べて欲しい人がいるんだ」

「誰？」

「特命者リストにある五十嵐麻美、彼女がなぜ特命者になったの調べられないかな」

言い出しづらかったがそれでも言わないわけにはいかなかった。

危惧した通り麻美の名前に涼子の顔がこわばった。

「誰なのこの人？ ひょっとして克行の恋人？」

「……うん」

二人の間に一瞬冷たい空気が流れた。一瞬、涼子がきつく唇を噛んだのが見えたが、それでも何も深くは聞こうとはしなかった。

「いいわ、そのリスト、今夜にでも私のところにファックスで送って」

涼子は克行から視線をそらすとポケットから名刺を取り出すとその裏に自分の携帯電話の番号と、ファックスの番号を書き込んだ。

「頼むよ」

克行はその名刺をクリップで特命者リストにはさむと書類といっしょに封筒のなかに入れた。

死のクリスマスイブ・5

五

克行がマンションに戻った頃にはすでに昼を過ぎていた。市役所に寄った後、そのまま会社へ向かうつもりでいたが、今ではそんな気持ちも失せてしまっていた。自分の持つ特命者リストのなかに、会社の人たちも数名載っている。彼らにどう対応したらいいかわからなかった。それに何よりも拳銃を持ったまま仕事をする気にはならない。

克行はコートを着たままダークグレイのカーペットへ腰を降ろした。まだエアコンがきいていないために、部屋の空気もカーペットもひんやりとしている。

克行はバッグのなかから書類を出してテーブルの上に広げた。拳銃の入った包みがコトリと音をたてて落ちる。

そつと包みを開くと黒く真新しい小型の拳銃が姿を現した。見た目は玩具の拳銃と変わらないのに、実際に握ってみるとそのずしりとくる重さで、それが玩具などではないと改めて実感させられる。弾倉にはまだ弾は装填されていない。試しに拳銃を操作してみると思った以上に扱いが簡単に出来ることに驚いた。説明書のようなものが一枚封筒に入っていたがそれを読まずとも扱うことは出来るそうだった。

見ると小さな透明のプラスチックのケースに金色の弾が六発、綺麗に並べられて入っている。一つ一つには丁寧なナンバーがふられている。克行の弾丸にはTR13-TX-60001から60006までのナンバーが刻まれている。このナンバーによって、誰が殺したのか判断するためなのだろう。

（まるで小学校の時の無記名アンケートと同じだな）

克行は心のなかで嘲った。

克行が今でも憶えている小学校の時のアンケート。それは教師が子供たちに無記名だということをくどいほど説明した後、結局は席順ごとに並べて回収されるという卑怯な手段のものだった。そしてそれは子供たちが秘密にしておきたいものに対してほど行われた。もちろんそれが実行出来たのは低学年のうちだけだったが、それでも克行はそのからくり気づいたとき教師に対して強烈な不心感を抱いたことを今でも憶えている。

克行はケースのなかから一つ取り出し、試しに一発だけ弾倉に装着してみた。ガチャリという音で弾倉が拳銃の中心に吸いこまれてゆく。まるでそれを待つていたかのように。この型の銃は外側からは弾の有無を判断することは出来ない。

何の気なしに部屋の隅の花瓶に狙いをつける。ふと、妙な感覚が心のなかに走る。そして、同時に今まで知らなかった自分が眠りから醒めるようなそんな不安が湧き上がる。

克行の瞼にヘラヘラ笑いながら楽しげに拳銃を乱射する男の姿が蘇った。

寺泉とか、泉谷とか、確かそんなような名前だったと克行は記憶している。

昨年の冬、克行が特権者優遇計画を初めてこの世のものと実感した時だった。深夜、仕事の帰りに克行は駅のホームで最終より二、三本前の電車を柱に寄りかかるようにしながら待っていた。ホームには克行と同じように仕事で疲れ今にも眠りこみそうにしている中年のサラリーマンや、デートの帰りらしいカップルがベンチに座りながら話をしている。少しして克行は泥酔状態でふらふらとホームの端から端を歩いている男が目に入った。男は電車を待つ人々に一々何かをつぶやきながら、ただふらふらと歩いていた。たいがいの人たちは男が何を言おうと何をしようと無視して構おうとはしなかった。男はベンチで身を寄り添わせているカップルにも同じように近寄り何かをつぶやいた。それはたんなるカップルに対する冷やかしのものだったのかもしれないし、あるいは女性に対して卑猥な言

葉でからかったのかもしれない。どちらにしてもさほどたいしたことでないことだろうと克行は見ていた。しかし、それに対し青年はからかわれたことに怒りを覚えたのかすつくと立ち上がり、そして泥酔している男に対して怒鳴り始めた。

「おまえには関係ないだろう！ どっか行け！」

青年の声は離れた場所にいる克行にさえ聞き取ることが出来た。周りの人たちはやれやれとばかりにぼんやりと横目でちらちらと見ている。

青年は二度、三度男を突き飛ばし男が黙っているとジロリと睨つけさつさと彼女のいるベンチへと戻って行った。

アナウンスが聞こえ電車が入ってくることを伝えている。

誰もこれで酔っ払いと青年との争いは終わったのだらうと思った。青年もすっかり深夜に出会った酔っ払いのことなど忘れてしまったかのようにベンチから立ち上がり入ってくる電車に合わせるようにホームで二人立っている。しかし、酔っ払いは真っ直ぐに背を向けている青年の背後につかつかと近寄ると何か黒いものをポケットから取り出し青年に向けた。

ズガン！

克行の目に、一瞬スローモーションのように写し出された。

青年の体はつんのめるように軽く前に浮き上がり、重量の法則に従いそのまま電車のはいつてくるレールの上へと落ちていった。

電車の急ブレーキ。

女性の叫び声。

そして、男のヘラヘラとした笑い声。

聞こえるはずのないもの、聞こえなければいけないものが交差しあいごちゃごちゃになって克行の耳へ届く。

男は青年を撃ったことで自制心を失ったのか、それとも酔っ払っていたことでもともと失っていたのか、触覚を失ったアリのよう

うろつろとつろつき、至る所に拳銃を乱射しはじめた。当然のように誰も男を止めようとはせず、逃げ惑うだけだった。克行も例外ではなくただ驚くばかりで何をすることも出来なかった。結局男は拳銃に装填されていた全部の弾丸を撃ちつくし、それでも撃ち足りないのか弾丸の入っていない拳銃を力チリ力チリと鳴らしているところを鉄道警備員に取り押さえられた。

男が特権者でそれがわかりしだい釈放されたということを、克行は翌日の朝のニュースで知ることになった。

本来、特権者優遇計画で犠牲（国に云わせれば受刑）になった者は被害者として扱われない。そのためマスコミでも事件として発表しない。しかし、この時はあまりにも事件が大きすぎたためにほんの二、三分だけが放送されることになった。それでもキャスターが淡々と、事件のことを報じた後でこれは事件ではないという意味のことを付け加えた。

男の名前は忘れてしまったが、男の顔だけは忘れることが出来ないでいる。

（今度あの男がどうなったのか涼子に調べてもらおう）

今の自分の姿がああ男の姿にだぶるようなそんな嫌なイメージが克行の頭を霞め慌てて弾丸を取り出すと銃をテーブルの上に投げ出した。

拳銃は軽く二、三回テーブルの上をクルクルと回ると銃口を克行のほうへ向けてピタリと止まった。それはまるで

（「おまえが撃たないのなら、俺がおまえを撃つてやるぜ！」）
と言っているようだった。

克行はすぐに銃をもとのように紙包みに包みどこにしまおうかと思索した。部屋には克行しかないのだから、どこへしまっても良かったのだがそれでも出来るだけ目につかない場所へ、そしてすぐに何かあったら手が届き忘れてしまうようなことがないところへ置いておきたかった。部屋の家具といったらほとんどが棚の類いで引き出しのあるようなものは一切見当たらない。部屋を見渡した結果

克行はベッドの引き出しへしまうことに決め、その一番奥へ拳銃を突っ込んだ。

（これで拳銃はいい、あとは……）

克行の目に市役所からよこされたいくつかの特権者優遇計画に関する書類が目についた。一番上に黒い厚手の表紙のついた特命者リストがある。

克行は恐る恐る手をのばし、もう一度リストを開いた。今度は市役所で見た時よりも一人一人じっくりと確認していく。確認のうえ別人であればいいと何度も思いながら確認していく。けれど、克行の祈りは通じることなくやはりその多くは克行の知った人々の名前だった。そのなかでも何よりも麻美の名前がひととき大きく克行には見えた。そしてそれは他の特権者にも同じように麻美の名前が特に目立って見えるのではないかという錯覚さえも引き起こした。

（五人、俺をいれて五人の特権者が麻美の名前の入ったリストを持っている）

そのことが何よりも心配だった。もし、自分のリストだけに麻美の名前があつたなら何の心配をすることもないだろう。来年特権者を外されることを、最悪の場合自分の名前が特命者リストに載ることを覚悟すればいいだけの話だ。麻美に銃を突きつけられるよりも自分に銃を突きつけられたほうが数倍気楽でいられるだろう。

（だが、今年銃を突きつけられてるのは俺じゃない。麻美なんだ）

克行の心のなかには暗く、重々しい影が広がっていた。例えばそれが参考リストとはいってもリストに載っているのと載っていないのとは大きく違ってくる。

（何とか救えないだろうか）

克行は書類を袋から出し、その規則や条文を読み始めた。そのなかから麻美を救う手段をなんとか捜し出したかった。しかし、そこに書いてあるのは本当に簡単な今日あの分厚い眼鏡をかけた市職員が喋った以外のことは一切載っていなかった。確かに憲法のように

細かく規則が載っていたところで裁判に持ちこむことが出来るわけもなく、市に麻美の名前をリストから削るように進言することも出来ないだろう。一つだけ特命者のリストからの削除という項目があったが、それはまったく話にならない。特命者リストから外される条件は唯一その当事者が特権者優遇計画の直前に死を向かえた場合、または他の特権者によって受刑になった場合だけなのだ。いずれにしても特命者の未来にあるのは死だけしかない。一週間逃げ続けられればいいなどという考えも基本的に無意味な考えだ。なぜなら特命者リストに名前が載ったことは発表されるわけでもなく、また特権者が特命者に伝えたとその特権者は処罰（内容は不明）されることになっている。

（処罰？）

克行の心にある一つの思いが走った。

（処罰？ そんなものくらいで麻美が救えるのなら……。それに特命者全員は無理だとしても麻美だけならば伝えたところで市役所にばれることだってない。そうだ、麻美に特命者リストに入っていることを伝えて一週間特権者から逃げればいいんだ）

それはごく単純な考えかただったが、暗闇のなかを暗中模索してきた克行にとって一筋の光となって未来を照らしているように思えた。

R R R.....

突然、携帯電話の電子音が部屋中を満たした。部屋はすでに暖まり少し暑くさえ感じ出している。克行は思い出したようにコートを脱ぐとベッドへ投げ出し、その手で上着のポケットのなかから携帯電話を取った。

「はい」

——風間さんですか？

会社の後輩である磯崎和歌子の声だった。

「ああ」

——体、大丈夫ですか？

「体？」

——医者に寄ってから出社するって言ってましたけど。休まれるんですか？

磯崎和歌子の言葉に克行は具合が悪いと嘘をついたことを思い出した。時計を見るともう一時を過ぎている。

——もしもし……あの、そんなに悪いんですか？

克行の下で働いていることもあってかその声は本当に心配しているようだった。

「いや、そんなこともないけど……でも念のため今日は休ませてもらうよ」

実際に熱があがってる気がした。

電話をしてきたのが彼女でよかったと克行はほっとしながら答えた。彼女の名前はリストのなかに載ってはいない。今日はリストに載っている当事者とはまともに話が出来そうになかった。

——何か用事ありますか？ 仕事のことで何か。

「そう……特に思いつかないな。この前頼んだプログラム、明日までに仕上げられるかい？」

——はい、大丈夫です。あ、西崎さんに変わりますか？

同僚の西崎の名前に克行はびくりと身構えた。西崎の名前はリストの十三番目に載っている。電話の向こうで電話が微かに西崎に送られる気配がした。

「いや、いいよ。別に用事はないから」

克行の言葉で西崎の出る気配が消える。

——そうですか。他に何か？

「ないよ、明日は出社するよ。それじゃ、明日」

——はい、お大事に。失礼します。

「さよなら」

克行は静かに、けれど素早く切った。

死のクリスマスイブ・6

六

十二月 十二日 (火)

駅から歩いて約五分、そのオフィスビルの七階に克行の務める会社がある。

そのビルにあるのは克行の会社ばかりでなく、他に五社ほどがビルを借りていて、そのためかあまりセキュリティは厳しくなく、誰でも自由に出入り出来る。克行の会社では七階から九階の三つのフロアを借りている。社員数は約二百人、このビルではその半分ほどが働いており、他の社員たちは皆顧客先での勤務が多い。

九時十五分、克行はいつもよりも少し遅く出社した。今ではフレックスタイムの導入は常識のようにはなっていない。もちろん克行の会社も導入してはいるが、克行の会社の場合顧客との密接した打合せなどが頻繁なためそうそう遅く出社するわけにはいかないため、社員のほとんどが九時までには出社するようになっていた。

「おはようございます」

オフィスに入るとすでに仕事に入っていた社員たちが顔を見上げた。

「おはよう」

克行は出来るだけ視線を避けるようにしながら自分の席へと歩いていった。克行のいるフロアは若い社員たちで占められ、管理職以外は克行と同年代か年下の者が多かった。

「よう、体大丈夫か？」

席へつくとすぐに向かいの席の西崎が声をかけた。西崎とは同じ年に入社し、その後ずっと同じ課で働いてきていた。日焼けしたその顔はスポーツマンらしさを誇示しているようにも見えた。

「たいしたことないよ」

「良かった、今おまえに倒れられちゃ大変だから」

西崎はそう言って笑った。その笑いすら今の克行には苦痛に感じた。

（おまえの命は今、危険にさらされてるんだぞ）

そう忠告してやりたかった。だが、そんな忠告が出来るはずもなく、それどころかなぜこの男が特命者リストに載せられるのだろう、と好奇心すら覚えた。

実際、特命者リストのなかに登録されている人たちのなかに克行の知っている人たちは何人もいるのだが、なぜその人たちが特命者リストに登録されているかそれがまったく克行にはわからなかった。
「あ、そうだ……風間、おまえのことを部長が呼んでたぞ」

「部長が？」

「おまえ何かしたのか？」

西崎は冗談めいた口調でそう言うと、克行の答えを待たずにすぐに仕事に戻った。それは今の時期まったく当たり前の動作で克行も気にならなかった。それほど皆仕事に追われているのだ。

オフィスの一番奥の部長席を見ると、部長の桜川が克行の社に気づいた様子でこちらを見ている。

部長の桜川登は今年ですでに七十八歳を向かえている。八年前高齢化社会により政府は年金支給年齢をついに八十歳以上と決めた。その影響で企業の定年年齢も引き上げられたために桜川は今でも現役として働き続けている。すでに頭は剥げ上がり、残っている髪もほとんどが白く変わっている。

克行は所せましと並んでいる机のわきの通路を通って部長の席へ歩いていった。足がやけに重く感じる。

「やあ、体の具合はどうかね？」

克行が近づくと桜川は相手を探るような目で言った。

桜川の名前は特命者リストに入っている。

（なぜ、部長が？）

克行は不安になった。桜川が知っているのではないかと克行は危惧した。これまでも体調を悪くして休んだことがなかったわけではない。だが、そんなこと今まで尋ねられたことなど一度もなかった。それどころかこれまで桜川とは口をきいたこともほとんどなかったからだ。

「……ええ、もう大丈夫です。けど……なぜです？」

「ああ、いや……」

克行の問いに桜川は言い難そうに目をそらした。

「どうかしましたか？」

「いや……べつに……ただ会社も今だいぶ忙しくなってるんで体でも悪くしたんじゃないかと思ってね。君、昨日休んだろう。大丈夫かね」

その言葉の様子に克行は、桜川がもつと別のことを聞きたいのだと察知した。それは克行が最も知られたくないことだろうということとも。

（部長は昨日何があったか知ってる……でもなぜ？）

克行は当惑した。もちろんそれは克行の想像でしかないし、桜川が知っているなどということ信じたくもない。だが、桜川の不可思議な言動は克行の心を揺り動かした。

「風間君？」

桜川の声に、克行は我にかえった。

「は、はい」

「君、本当に大丈夫かね？」

「ええ、もちろんです」

克行は平静を装った。

何かが起こったのはその日の夕方だった。克行はあの後何も考えないように務めた。特権者優遇計画のことを一切忘れ、仕事だけに意識を集中した。

だが、一本の電話が鳴ったことで事態は急変した。

——やあ、風間さんかい？

一瞬克行には誰からの電話なのかわからなかった。

「どちら様でしょう？」

克行の頭のなかを顧客先の人たちの顔がいくつも横切って行く。

だが、どれもその声に該当するものはなかった。

——俺だよ、俺、立花だ

克行の頭のなかが真っ白になった。

「立花……」

——そうだ、昨日市役所で会ったろう。忘れちゃったわけじゃないだろう

もちろん憶えていた。特権者に選ばれることを唯一の楽しみとしている警察官。克行は一瞬自分が過去に大きな犯罪を犯したことがある人間に思えた。これは刑期を終えて出所した受刑者が昔刑務所で知り合った受刑者に会うのに似ている。ほんの少しの間忘れかけていた計画のことが一気に蘇ってきた。

「……なんでしょう？」

克行は周りの社員に気づかれないようにしたが、それでも声はやかに重々しく変わってしまった。はす向かいの席の磯崎和歌子がちらりと克行に視線を向ける。

——今日、何時頃仕事終わるんだい？

「え？」

——ちよつと会えねえかなあ

「なぜですか？」

——聞きたいことがあるんだ。それにせっかく知り合えた仲間じゃないか。少しくらいつきあってもいいだろう。俺、今日非番なんで暇を持て余してるんだ。

「仲間」その言葉がなおさら克行の心を重くした。

「今どこにいらっしゃるんですか？」

——あんたの会社のすぐそばさ

克行はどきりとした。そういえば先日はただ名前を教えただけで

克行がどこに勤めているかを教えたつもりはなかった。もし、教えたとところで大手の会社と違ってすぐにわかるようなものでもない。それなのに立花は昨日の今日でもう克行の職場まで電話をかけてきている。

——おい、どうしたんだい？ 会ってもらえるのかい？

「は、はい。それじゃ——これからどうですか？」

——これから？

「ええ、三十分くらいならいいです」

——かまわんよ

「それならロビーで待っていてもらえますか。すぐ降りて行きます」
——待つてるよ

プツリと電話が切れる。

克行は少しの間茫然と電話を見つめていたが、やがてしかたなく立ち上がった。本来ならば二度と会いたくない相手だ。しかし、もし今日会えないと言ったところであの男はきつと明日、明後日また連絡してくるだろう。それに、なぜあの男が克行に会いたがっているのかその理由も気になった。あの男は「仲間」などという感情で動くような男ではない。もっと何かあの男にとって大事なことがあるのだろう。

克行がロビーに降りると立花がソファに座ってのんびりと煙草を吸っているのが見えた。

「よお」

立花は克行を見て軽く手をあげ立ち上がった。昨日と同じ上下黒いスーツを着こんでいる。

「お待たせしました。さあ、こちらへ」

克行は事務的な口調で、立花をうながして地下へ歩き始めた。地下には三件ほど喫茶店が入っており、よく顧客との打合せはそこで行われていた。本来、会社のそばで特権者優遇計画に関連する行動はとりたくなかったが、それでも立花と二人でどこかで話すというのは気がすすまなかった。何よりここならばあまり時間とらずに

済むと考えた。

克行は喫茶店のガラス窓からなかを覗き、知り合いがいないのを確かめてからなかに入って行った。

克行たちは奥のなるべく周りに人がいないところを選んで座った。

「なんでしょう」

克行はウェイトレスにコーヒーを頼んだ後さっそく立花に尋ねた。

「何か聞きたいことがあったんでしょ」

「まあな」

立花はとぼけるような感じできょろきょろと周りを見渡した。

「それならどうぞ、仕事の都合であまり時間がないんです」

「そうかい、それじゃてつとり早く済まそうか……あんたの会社に桜川って部長さんいるよな」

「桜川部長？」

突然出てきた桜川の名前に克行はどきりとした。だが、次の瞬間その意味を悟った。立花の特命者リストにも桜川の名前が載っているのだ。

「いるだろう？」

「ええ——でも、なぜです？」

克行はわざととぼけて聞いた。

「いや……どんな人なのかと思ってね。それで出来たら……」

ウェイトレスがコーヒーを運んできて立花は言葉を切った。立花は砂糖もクリームもいれないままコーヒーをすすったが、熱かったらしくすぐに口を放した。

「出来たら——なんですか？」

克行はこちらから立花をうながした。

「写真をね……」

写真、その言葉ではつきりと立花の特命者リストに桜川の名前があることを確信した。特命者リストには特命者の住所や勤務先は載っていても写真は出ていない。立花は桜川を殺すために写真を手に入れたがっているのだ。だが、立花もさすがにそのことを表に出す

つもりはないよう言い難そうに見える。

「写真ですか？」

克行はあくまでとぼけることにした。そしてとぼけながらどうするべきかを考えた。

「どんな人が写真が欲しいんだ」

立花の目がギラギラと克行を見つめる。その目には克行を通して桜川に対する殺意が明らかに読み取れた。

「あいにくですが」

「ないのかい？」

「今手持ちのものはありませんね。ただ一ヶ月か二ヶ月待ってもらえば手にいれることは出来ると思います」

克行は考えたあげくそう答えた。さすがに自分の知っている人間を矢面にさらすようなことはしたくなかった。克行の答えに立花の表情が曇った。その目からはまだ殺意は消えてはいないが、とりあえず一歩踏み誤ったというような表情に見えた。

「そうか……」

立花はカップを持つといっきに飲み干した。もうぬるくなっているのかと克行も一口飲んでみたがまだそれほど冷めたわけではなかった。

「俺は行くよ」

立花は金をテーブルに置くと不機嫌そうに立ち上がった。克行の一言ですでに別の方法と考えはじめているのだろう。

「待ってください」

克行は慌てて呼び止めた。

「なんだい？」

「いったいなぜ私の会社がわかったんです？ 私は名前しかあなたに教えていません」

立花は克行の質問ににやりと口をまげた。

「俺の職業教えたらう」

背筋が凍るような思いがした。この男ならば桜川の写真もすぐに

手にいれることだろう。立花はもう克行のことなど忘れてしまったかのように一人ですたすた早足で出て行ってしまった。

克行は立花が出て行くのを立ち上がりその場で見送り、立花が見えなくなるともう一度座り直した。おそらく、立花はこんなことで桜川を狙うのをやめたりはしないだろう。

なぜだか、立花とはもう一度どこかで会わなければいけないような気がした。

死のクリスマスイブ・7

七

十二月 十四日 (木)

涼子から会社にいる克行に電話があつたのは木曜の夕方だった。涼子の口調から彼女がひどく興奮していることが読み取れた。

克行は夜、涼子に会おうと言つたが、涼子は外で会おうとした克行の意志に反してマンションに来ると言い張つた。確かに事が事だけに外で話すよりもマンションのほうが良いかもしれないと、克行は涼子の言葉に従うことにした。

克行は駅からマンションまでの道順を教え、涼子の来る時間に合わせ早めに仕事を終わらせ帰宅した。帰宅したのは九時過ぎだったが、どうやって入ったのかすでに涼子は克行の部屋に上がりこんでいた。

「どうやって入ったんだ？」

「ごめんね、妹だつて嘘ついて管理人さんに鍵を開けてもらったの」
涼子は悪びれた様子もなく驚く克行に笑いかけた。お人好しともいえる管理人の杉本老人の顔が思い出された。麻美に比べればずっと大人びて見える涼子が克行の妹などと本当に信じたのだろうか。

すでに部屋はファンヒーターによつて暖まっている。まるで何度も訪れているような雰囲気だ。涼子は部屋でくつろいでいた。その涼子の様子に克行は大学時代に同棲していた時のことを思い出した。
「ずいぶん早かつたんだな、こんなに早く来るとは思つてなかつたよ」

「べつに構わないわ。仕事、急がしいんでしょ」

「十二月にもなるとさすがにな。おまえもう何か食つたのか？ 何か用意しようか？」

「食事はもう済ませたからいいわ」

「それで、何かわかったのか？」

克行はすぐに特権者優遇計画のことに話を移した。あまり個人的な話を涼子と続けたくはなかった。いまさら涼子とよりを戻すつもりもない。

「ええ」

涼子は仕方無いという素振りでバックのなかから書類をいれるような封筒を取り出した。その真剣な眼差しにいつしか克行の表情も堅くなっていった。

「悪い情報か？」

けれど涼子はその質問には答えようとはしなかった。

「これを見て」

涼子は青と赤に分けられた数枚の書類を克行に突き出した。

「これは？」

「青い用紙のほうは今回の特権者優遇計画で特権者に任命された人たちのマスター・リスト。そして、この赤いほうが特命者のマスター・リスト。今日、役所の端末を叩いてリストにしてきたの」

どちらの書類にもびっしりと名前や住所、年齢などいろいろな情報が並んでいる。

「それで？」

「そのなかには克行の名前はないわ」

克行は驚いて涼子を見つめた。

「ない？」

「そうよ、しかももう一人。頼まれていた五十嵐麻美さん、彼女の名前もないわ」

「特命者リストに？」

「特命者リストにももちろん特権者リストのほうにも。ただし、不思議なことに各特権者への特命者の割り当てを行った後のファイルには、はっきりとあなたの名前も彼女の名前も載せられている。しかも、もう一つ不思議なことがあるの。各都道府県毎の特権者、特

命者の人数は国が決定し、各市毎の数はその県が決めることになっているわ。今回、うちの市に割り当てられた特権者の数は百八人、都道府県ごとに割り当てられた特命者は六千二百六十四人。問題なのはこの中身なの。このなかには克行も、そして彼女も含まれてないの」

「どういうことなんだ？ 俺には何がどうなってるのかわからない」

「そうね。ただのミスってことも考えられるわ」

「ミス？」

「特権者優遇計画を実施するそれまでの過程のほとんどがコンピュータ処理で行われるわ。マスターからそれぞれのファイルへの振り分け、そして特権者への通知。全てがコンピュータに簡単な指示を行っただけ。だけど、一箇所だけコンピュータ以上の処理を事務員がやらなければいけない部分があるわ。それぞれの特権者への特命者の指定。そこで事務員がコンピュータに対する指示を一特権者毎に行われることになっているの」

「そこでミスが？」

「役所では今九十パーセントほどの情報はコンピュータ処理されるの。当然、市の住人の情報もコード化されファイルにある。特権者優遇計画にもそのファイルは参照という形で使われるの。おそらくその時、オペレータが誤ったコードを指示した」

「指示を間違った？ オペレータのミス？ そんなことで彼女の名前が特命者リストに載らなければならなかったのか？」

克行は思わず大声を出した。

「まあ、待つて」

「待て？ 命が危険にさらされたんだぞ。ミスなんて言ってるのか？ 明日にでも役所に行って彼女の名前を削除させる」

「無理よ」

涼子の声に克行はびくりとした。それほど涼子の声には緊迫した雰囲気があった。

「なぜだ？」

「そんなことが出来るようなところならそんな単純ミスをやらかしたりなんかするわけがないじゃない。ミスと言っても一度リストに載ってしまったものを取り消すことなんか出来るわけないわ」

「……」

まったくその通りだった。特権者とか特命者とか選定はされているが、結局のところそれは人工削減の手段というだけで国にとつて特権者が特命者リストに載っていても特命者が特権者リストに載っていてもいっように構わないのだ。

「それに……」

やや間があつてから涼子はさらに付け足した。「今度のことが本当にミスかどうか……それもまだ判断出来ない」

「なぜだ？ マスターファイルに載っていないかつたんだ。ミス以外何が考えられるっていうんだ」

克行はなかばやけになつて吐き捨てた。

「実は毎年通常のファイル以外にシークレットファイルが設定されることになっているんだけど――」

「シークレットファイル？」

「ええ、文字通りそのファイルの中身は役所のなかでも限定された人間しか見ることが出来ないようになってるの」

「つまり実行委員会のメンバー？」

「もつと限定される。役所のなかでもおそらくあれを見ることが出来るのは市長をいれて三人くらいしかないと思う」

「そんな秘密にしなければいけないものっていったい何が入ってるんだろう」

「さあ……けどひょつとしたらそのなかにあなたたち二人の名前が突然現れた原因が隠されてるかもしれない」

「見れないのか？」

涼子に危険を押しつけることになるかも知りながらも克行は聞かずにいられなかった。

「見ようと思えば……」

涼子はそう言っただけで微笑んだ。その笑顔に克行は涼子が初めからそのつもりだということに気がついた。

「見るつもりなのか？」

「もちろん。克行の恋人の命がかかっているんだもの。そのくらいのこととしてやらなきゃ。それに私自身もかなり興味があるの」

ぎゅっと固く拳を握り涼子ははつきりと言った。その姿に一度はシークレットファイルのなかを知りたいと思った克行も、涼子がかにかひどく危険な道を歩き出そうとしているようで心配になった。

「危険じゃないのか？」

だがすでに涼子はもう心を決めてしまっているようだった。

「大丈夫よ、克行だってコンピュータには詳しいからわかるだろうけど実際にシステムを管理している人とシークレットファイルを見ることが出来る者とは違うの。だから、よほどしっかり管理してなきゃ私がシークレットファイルを覗き見たところでばれやしないわよ」

その涼子の言葉に克行もそれ以上言おうとは思わなかった。実際にどんなに危険だとしてもそのシークレットファイルを見ることが麻美の命を救えるかもしれないからだ。

「気をつけてくれ」

克行は一言だけ告げた。

「わかってる。私だってまだ死ぬつもりないわ。他に何か私に出来ることない？」

「もう一つ調べて欲しいことがあるんだ。以前、駅のホームで乱射事件を起こした特権者のことを憶えているか？」

「泉谷のこと？」

「そう、そんな名前の男だった。なぜ知っているんだ？」

「私だって去年は委員会のメンバーだったのよ。そのくらいのこと知っているわ」

「そうか……その男がああ後どうなったか調べられないか？」

「死んだわ」涼子は即座に答えた。

「死んだ？」

「今日、計画のことを調べているうちに過去の記録が目についたんだけど、その男のことも記録に書かれていた。あの事件を起こしてから二ヶ月後に青酸カリで自殺してたわ」

「自殺……」

「でも、本当に自殺かどうかはわからないけどね」

「わからないって？」

「国にしてみればこの特権者優遇計画のことをあまり表沙汰にはしたくないのよ。だからこそマスコミにも圧力をかけている。そんな時にあんな事件でしょ。ひょっとしたら殺されたのかもしれない」
「……」

涼子の言葉に克行はぞっとした。

「ああ、そうだ」

涼子は思い出したようにつぶやいた。それは多少芝居がかったもので、実のところ涼子が今日克行を訪ねた一番大きな理由がそこにあったようだ。

「どうしたんだ？」

克行は涼子の言葉にどきりとして彼を見つめた。どんな形であれ、今役所に務める涼子の言葉は驚かされる。

そんな克行を満足気に眺めてから涼子は内ポケットから四つ折にされた一枚の用紙をばいとテーブルの上に投げ出した。

「はい、お土産よ」

「土産？」

克行は涼子の表情に注意しながらその用紙を広げた。

用紙には5人の名前と住所、電話番号などの各自の情報が載っていた。おそらく市の住民ファイルからのコピーなのだろう。その5人のなかには克行自身の名前、さらに克行の仕事上の知り合いが二人、そしてあの立花の名前までもあった。

「これは……？」

おそろるおそろる克行は訪ねた。立花の名前があることでそれが非常

に重要な意味のあることは察しがついている。

「わからない？」

いたずらっぽい目で涼子は克行を見た。

「まさか……」

克行ははっとした。

「そう、そのまさか。あなたの大事な彼女の名前の入ったリストを持つ者の名前よ。そいつらが彼女の命を握ってるわ」

あなたの大事な、その部分に力を込めて涼子は言った。

「これが……」

克行は改めて用紙を見つめた。さっきにも増してそこに書かれた名前が大きく見えた。何よりも立花の名前のあることが克行の心に暗い影を落としていた。

（役所で声をかけられたあの時からそういう運命だったのかもしれない）

あの立花の狂ったようなにやついた笑いが脳裏に蘇ってくる。

「私のほうもいろいろと麻美さんを救う手段は考えてみる。だけど、最後の手段としてはあなたの持つ権利を使う以外ないかもしれないわね」

すでに涼子の顔からはあのいたずらっぽい笑みは消えている。

「ああ」

克行自身そのことはとてもよくわかっているつもりだった。もし涼子が調べてくれていなくてもそれでも何とかして麻美を狙う特権者を消し去るつもりでいたのだ。

「拳銃は？」

「え？ ああ、あるよ」

克行はベッド脇の引き出しの奥から包みに包んだままの拳銃を取り出した。その拳銃の保管場所に涼子は不満を覚えたような目と言った。

「あと二日で特権者優遇計画が始まるわ。明日からはつねに銃を持ち歩くようにして。へたすると特権者のほうが特命者に命を狙われ

る可能性だつてあるのよ」

「特権者が？」

「過去に偶然自分が特命者として登録されていることを知って、その特権者を殺したという例が二、三件あったって話を聞いたことがある。無理もないわ。誰だつて殺されるよりは殺すほうがまだいいと思つてゐるのよ。克行も氣をつけたほうがいいわ」

「殺されるよりも殺すほう……か。確かにそうかもしれないな」

克行はうつむいてつぶやいた。

「え？」

「殺されるよりも殺すほうがいい。その通りだ。俺だつてこんな立場じゃなければ、配られたのがこんな特命者リストじゃなく、まったく知らない奴らの集まりだったならきつとそう思えただろう。誰だつてそうだ、誰だつて死にたいなんて思つてゐる奴なんているはずがないんだからな」

心のなかでまだ形になつていない不形成な気持ちまでもが激流のように克行の口から漏れた。それはまったく嘘偽りのない今の克行の気持ちだった。

「そんなこと考えちゃだめよ。今はただどうやって乗り切るかだけを考えなきゃ」

「考えてる、考えてるさ。けど、おまえからこの彼女の命を握つてゐる奴らのリストをよこされた瞬間から俺の頭のなかにはこいつらをどうやって、いつ殺すか、そんなことばかりが浮かんできてるんだ。俺もあいつらと同じだ。人を殺すことを楽しんでゐるあいつらと変わりのないんだ！」

「……克行……」

涼子の手が克行の左手にそつと触れた。その感触に克行ははつとして顔をあげた。涼子の顔がすぐそこにあった。忘れていた学生時代の二人の姿がそこにあった。

——私、克行のことを忘れない。

別れ際に言つた涼子の言葉がふつと脳裏をよぎつた。

愛してる。

愛してる。

愛してる。

心がああ頃へ引き戻される思いがした。

克行は必死にそれを否定しようとした。全ては終わったことだ、過去のことだと思いこもうとした。だが、出来なかった。

涼子の赤い唇が克行の唇に触れた瞬間、克行はほとんど本能的に涼子の体を抱きしめていた。やわらかなその感触はああ頃を彷彿させるのに十分だった。

死のクリスマスイブ・8

八

坂本伸一・三十九歳

K I N I C 株式会社 係長

旭台衆応 2 - 5 - 7

0 5 2 1 4 - 3 3 6 4 - 1 5 4

ランク・C

富士川義幸・二十八歳

私立川越高校 教員

境八日町牛込 6 5 - 7 - 3

0 6 5 2 8 - 1 4 7 3 - 5 8 1

ランク・B

波川稔・四十二歳

I M M 技術研究所 課長

石沢亜栗 4 2 - 8 8 3 - 1

1 0 5 7 1 - 2 0 1 0 - 1 1 2

ランク・C

立花勇作・三十一歳

港橋警察署勤務

穂墨区高城 8 - 6 9 - 4 4

2 1 0 2 - 5 8 6 0 - 3 2 3 6

ランク・A A

風間克行・二十六歳

KCS株式会社

八坂区背能85-5-67

0137-5671-4207

ランク・C

碓井正隆・十九歳

八野倉大学二年

石鷹区駆詰42-44-82

メゾンWATASE202号室

0150-8884-2956

ランク・C

乱れたベッドに寄りかかりビールを飲みながら、克行はベッド脇にある電気スタンドの小さな明かりで涼子の置いていったリスト（「殺人者リスト」、涼子と克行の二人はこの麻美の命を握る克行を含めた六名のリストをそう呼ぶことに決めた）に見入っていた。

気のせいかほのかに涼子のつけていた香水の香りが、まだベッドに残っているように感じられる。ほんの少し麻美にたいして後ろめたさを感じていた。

おまえは自分の恋人が危険にさらされようとしているのに何をやっているんだ？ それともこのまま麻美のことなど忘れてしまつて涼子とよりを戻すつもりか？

まだ涼子の白く豊かな乳房の感触が、そしてあの時の彼女の声もまたはつきりと記憶に残っている。

（早く忘れてしまえ！）

涼子とのことはどうせ、一夜のことに過ぎない。そもそも、このまま涼子とよりを戻す気持ちなどまったくくないのだ。

——愛してるわ……私が克行を守ってあげる。

帰り際に耳元で囁いた涼子の声が頭に響き、克行は頭を押さえた。忘れるんだ！ 今考えなきゃいけないのは殺人者リストのなかに

ある特権者からいかにして麻美を守るかということだけだ。

克行はいつきに飲みかけのビールを飲み干すと、再びキッチンの冷蔵庫のなかからもう二罐取り出してきた。アルコールの力で全てを忘れ去ってしまいたかった。すでに四罐、飲み干しており、かなり酔いがまわってきているのは自覚しているが、それでもまだ足りないように思えた。無意識のうちに指でカタカタとテーブルを小刻みに叩いていることに気づいた。煙草が吸いたかった。銘柄などはなんでも良い。とにかく煙草を口にしたい欲求にかられていた。三年前にやめて以来ずっと口にしていない。以前ならば買い置き煙草がいつもどこかにあったのだが、今では微かな煙草の匂いすらしていない。かといって今から買いに行くわけにはいかない。情けないことに、彼はアルコールにまるで強くなかった。これから煙草を買いに行こうとすればおそらく幾段も連なる階段を一階まで無事に下りることはとても危険な賭けになるだろう。もし無事に自動販売機まで行ったとしても帰ってこられる保証はない。克行はじつと我慢し、煙りの代わりにアルコールを体のなかに流しこんだ。ビールで足りなければとっておきのウイスキーを開ければいい。

（それにしても……）

何か強い意志によって自分の運命が決められているようなそんな不安を克行は覚えていた。

先日は自らの会社の上司や同僚、そして恋人の名前を特命者リストのなかに発見し、今日は協力会社の上役、顧客先の課長の名前を特権者リストに見つけることになった。KINIC株式会社の坂本IMMの波川がそれだった。二人とも一年くらい前から仕事を通じて知り合い、現在でもよく仕事で顔をあわせる。坂本にいたっては今日も電話で話をしたばかりだ。

（彼らが特権者だったなんて……）

自分の回りの人間関係がほんの二、三日の間にぼろぼろと崩れ去って行くような感じがした。

もう一度特権者リストを見つめてから克行はおもむろにビールの

罐を開け、半分ほどグビグビと飲んだ。アルコールが体のなかで暴れているのがわかる。このままのペース飲み続ければ、一時間後には確実に胃に納まっているものは全て外へと放出されるだろう。それがわかっていても、克行は飲み続けることを望んだ。

逃げ出してしまいたい……

このまま麻美のことも特権者優遇計画のことも全て忘れて逃げ出せたならどれほど楽になれるだろう。なによりも今回の特権者優遇計画は危険すぎる。それは涼子に言われるまでもなく、麻美の名前をリストに見た時から克行にも本能的に感じていた。なぜだか自分が特権者優遇計画の全ての中心に位置しているようにさえ思えた。

この特権者優遇計画には何者かの大きな意志が働いている。それが国家の意志なのか、それとももっと別の誰かの意志なのかそれはわからない。だが、それでも大きな意志が働いて克行に「死」という素敵なプレゼントを送ろうとしている。

イバラの鞭を持ったサンタクロースのプレゼント。この年齢になって再び現れた悪夢のサンタクロース。特権者というそりに引かれ、袋のなかには多くの「死」が入っている。爽やかな笑顔を振りまいてサンタクロースは言うだろう。『年に一度のクリスマス。サンタクロースからのプレゼントをさあどうぞ』それからおもむろに袋を開けて黒光りする拳銃を取り出す。そして、爽やかな笑顔はそのままに拳銃を乱射する。

それはあまりに馬鹿げていて、見ている人々はショーだと思って喜ぶだろう。ああ、何て素晴らしいクリスマス、何て愉快的クリスマス。それが現実だとわかつているのはサンタクロースとそりを引いている特権者たち、そして殺された人々。

今年は自分もそのショーに加わろうとしている。

（忘れてしまえ！）

それなら本当に忘れてしまうか？ 麻美のことなど過去のことと葬ってしまうか？ そして麻美が無事に生き延びたことを知ったならばまた戻ってくればいい。おまえなら出来るじゃないか。涼子に

やったことをやればいいんだ。

ちくしょう！

再びビールにしがみつき、一気に残りを飲み干した。そして、すぐに次のビールへ手を延ばす。いよいよもって世界は回り始め、体は克行に警告を促す。克行はその警告を快く無視した。

克行は自分を含めた殺人者リストを改めてまじまじと見つめた。文字がふにやふにやと踊って読める。

しかし、何よりもその殺人者リストのなかで目をひいたのはあの立花勇作の名前だった。しかも彼の特権者としてのランクはAA、つまり最も優れていると評価されている。涼子の話ではランクAの特権者でも数人いるだけでAAというのは涼子も初めて見たと言っていた。そんな男を克行は相手にしなければいけないのだ。

俺はあいつに勝てるのか？

克行はふと立花の姿を思い描いた。警察官として十分なまでにがつちりした体、そしてあのどこか神経質そうな身のこなし、まともにやりあつて勝てるとはとうてい思えなかった。ただ一つ克行が有利な点といえば立花がこれほどの特権者優遇計画に対しての情報を得ていないだろうということだけだ。しかし、それでも克行にはあの男の死体の姿を想像することは出来なかった。

あいつが麻美を狙わないことを祈るだけだ……

全てのものを投げ捨ててでも麻美を守りたいと克行は思った。そのためならばどんなことをしてもいいと本気で思った。もし、立花が部長の命を狙うならばそれを手伝つてもいいと、いや、会社の人間全ての命をくれてやつてもいいとさえ思った。

「麻美……」

克行はぼんやりと宙を見据え、麻美のことを思った。

麻美はどう思うだろう。俺が特権者となったことを、そして彼女が特命者として俺のリストに載ったことを……

告げたくはなかった。だが、そんなわけにはいかない。麻美のためにも、そしてこれからのためにも彼女に話さなければいけない。

アルコールがまわり朦朧とする意識のなかで彼女のことをなんとなくでも守ってみせると克行は誓った。

時計の針はすでに午前二時をまわろうとしている。

死のクリスマスイブ・9

九

十二月 十七日 (日)

冬にしては暖かい風がそよそよと頬に触れる。公園は冬だというのに、それでも日曜になるとカップルや親子連れが姿を現す。

克行はベンチに座り、じつとその平和そうに見える光景を眺めていた。その頭のなかは当然のことのように麻美のことを、そして今夜から始まる「特権者優遇計画」のことで占められている。

先日の夜以来涼子からは何の連絡もない。克行のほうからも彼女に連絡はしていない。連絡しづらいということもあったが、どちらかというと全面的に涼子を信頼していた。彼女が連絡してこないということは何の情報も得られないということだ。そのため克行は新たな道を模索しようと試みることにした。

公園の中心にある花時計がきっかり午後一時を示した時、一人の男が克行のいるベンチに向かって歩いてくるのが見えた。

男は克行を見定めると人なつこい笑顔を浮かべ軽く手をあげた。

「やあ」

克行もまた軽く左手をあげてみせた。右手はしっかりとコートのポケットへいれられ拳銃を握っている。

「久しぶりだね」

藤井和弘はそう言っただけで克行の隣へどつかと腰をおろした。記者である藤井とは三年前の冬に会社の仲間に誘われるままに行ったスキ―場で知り合った。克行よりも二つ年上だが見た感じはそれよりもずっと年上に見える。

「仕事はどう？ 忙しい？」

「ああ、例のごとくさ。俺たちは常に忙しく常に暇だからね。忙し

いのは能力がある証拠、暇なのは無能な証拠だ。世間にやさんざん悪口を言われてるがね」

『アウトサイド』という藤井が記事を書いている雑誌のほとんどはアイドルのゴシップ記事が中心で、彼も常に年端もいかないアイドルたちを追いかけている。

「あんたはよっぽど忙しいって言いたいのかい？」

「その通り。その証拠に俺は三日前にこの日本に帰ってきたってわけだ。それで？ その忙しいこの俺をこんな寒い公園に呼び出したわけを教えてもらおうか」

相変わらず人なつこい笑顔を見せながら藤井は言った。

「あんたのその笑顔を消してしまうかもしれない話だよ。へたすれば青ざめることにもなるかも」

「おいおい、冗談よせよ。俺のこの笑顔は生まれつきでね、俺が青ざめるとしたら俺の書いた記事がもとで雑誌の売れ行きがこつぴどく落ちこむってことだぜ」

「いいや、残念ながらそんな話じゃないよ。俺があんたと話をしたいのは「特権者優遇計画」のことなんだ。あんただって知ってるだろ」

克行はわざと明るいい口調で計画のことを口にした。藤井の顔から笑顔が消えたが、それはほんの一瞬のことだった。

「一応はね」

「どのくらいのことを知ってる？」

「さあねえ……どちらにしても俺の専門外の話だな。なぜだい？」

「なぜマスコミはあの政策について何も報じようとしないのかと思っ
つてね」

「不思議なことを聞くね。マスコミがそいつについて報じないことに何が問題があるっていうんだい？ それに「特権者優遇計画」、そいつは君にどんなふうに関わっているっていうんだ？」

藤井は何かを疑うようにちらりと克行の顔を見た。克行はその目に彼がすでにある考えに達していることを悟った。

「俺は今、最低でも六人あの世へ送り出すことの出来るものを持っているっていうことだよ」

ちらりと克行のポケットの膨らみを見て、さすがに藤井の顔からあの人なつこい笑顔は消え去った。だが、それほど驚いたような顔を見せなかった。

一瞬の沈黙の後、藤井はふうつと一息溜め息をついた。

「そういうことか……ちなみにそいつは最低六人じゃなく最高六人をの間違いじゃないのかい？」

「そうだね……」

いや、あくまでも最低六人なんだよ。と心のなかでつぶやきながらもあえてそのことには触れようとせずに素直に頷いた。克行が考えていることを全て伝える必要はない。

「それで俺に何をしろって言うんだ？俺に「特権者優遇計画」の問題性を記事にしろって言うのか？このゴシップ専門の記者にそいつをしろって？」

「べつにあんたにやってくれとは言っていないよ。ただ、それをやってくれる人を紹介して欲しいって言うてるんだ」

「同じことだ」

「なぜだ？なぜあんたたちはそれほどまでに避けようとするんだ？」

「君は考え違いをしているよ。マスコミはそれほど正義感が強いわけじゃない」

「それでもマスコミは常に政治のスキャンダルを報道しているじゃないか？以前、どこかの雑誌で「特権者優遇計画」のことを取り上げていたことがあった」

「俺も読んだ記憶があるよ。そういう物好き——いや、確かに正義感のある記者もいるだろうね。けど一人じゃ何も出来やしないよ。ちよつと手を出してみてもどこからか圧力がかってそれで終わしさ」

「圧力が？それが怖いのか？」

「怖いね、だが、記事にしないのはそれだけの理由じゃない。確かにうちの雑誌でも政治家のスキヤンダルは記事にするよ。たいして深い傷にならない程度のスキヤンダルにね。本当に政治家をつぶそうなんて考えて記事を書く奴なんかはいないよ。その証拠に決してそれらは彼らの命取りになることはないだろう。それにそんなスキヤンダルは民衆が望むことだ」

「それじゃ——」

「君が言っているものを民衆は望んじやいないよ。民衆が望んでいるのはあくまでもいい自らの楽しみを満足させてくれるスキヤンダルだ。政治家の汚職事件だってそうさ。政治家が裏で企業から金をもらっていることなんか、俺たちが報道する必要もなく誰でもがわかつていることだ。それでもバカな政治家がとんでもないミスをやらかす。それで俺たちがとりあえず報道し、民衆はとりあえず怒る。そして満足する。それだけのことなんだ」

藤井は軽く肩をすくめてみせた。

「そんな……そんなものでしかないっていうのか？」

「そうさ、うちの雑誌がよく売れるのはそういうわけさ。必ず毎週、どこかの可哀相な人々の記事が載る。過労で旦那を亡くした哀れな未亡人。血液感染によってエイズにかかって余命いくばくもない少年。そいつを読むやつらは一様に可哀相にと涙を流す。だが、心のなかじゃその哀れなやつらと自分とを比較しているのさ。私たちは大丈夫、私たちはずっと幸せだってね。人間なんて身勝手なもんだ。それにマスコミには大前提があるんだ。読者を不安がらせないことだ。例えば二、三年前から突如降って湧いた障害者たち。国は原因不明と発表しているが事実が違う。しっかりと原因究明されているんだ。だがその原因が問題だ。なんとその原因を作りあげたのは我が国には今やどうしようもない輸入品なのさ。アメリカ産の農薬だらけの米やオレンジ。しかし、そいつを発表するわけにはいかない。農薬のついていない米やオレンジなど世界のどこを捜したってありはしないからだ。確かに日本にもまだほんのわずかながら農家は存

在している。けど、しょせん日本人全てを支えることなど出来るはずがないんだ。一九九六年に米の輸入開放が間違っていたとしてもそんなことを今更言えるはずがない。知ってる奴らだけが注意するだけなんだ。マスコミなんてそんなものさ。正義感ぶっているだけで本当はみんな金のために記事を作りあげてるんだ」

「あんたはそれで——」

恥ずかしいのか？ 思わずそう言いそうになり克行は口をつぐんだ。そして藤井も克行が何を言おうとしたかは察したようにほんの少し視線をさけてうつむいたが、それほど気にした様子はなかった。

「確かに特権者に選ばれた君にとってそいつは非常に大きな問題で、政策が間違っていると感じてしまっても仕方がないことだと思うよ」同情するように藤井は言い、それからもつと驚くことを彼は口にした。「だが、俺は「特権者優遇計画」がそれほど間違った政策だとは思っちゃいないんだ」

「なんだって？」

克行は思わず驚きの声をあげた。「間違っていない？ 何を言ってるんだ？」

「まあ聞けよ。確かに君が感じていることはよくわかる。たとえば人工削減計画とはいえ人殺しをやるのは間違いだと言うんだろ。しかし、現実にはこの日本、いや世界中には人間がゴミ屑以上に存在しているんだぜ。そいつをどうやって解決しようって言うんだ？ 見なよ、あの光景を」

藤井はそう言って顎をしゃくりあげた。花時計の向こう側に二、三歳くらいの子供を背にした白髪の老人がのんびりと散歩しているのが見て取れた。

「あの小さな孫……いや、曾孫かもしれないな。いずれにしてもあの爺さんは子供を背にしょっている。君にはあの光景がどう見える？」

「実に平和的な光景だと思うね。まさか、子供が爺さんの頭に拳銃

を突きつけていなければだけど」

投げやりに克行は答えた。藤井が何を言おうとしているのかわからなかった。

「なるほど、拳銃を突きつけていなければか。それなら大丈夫さ。あの子はすっかり寝むっちまつてる。平和的光景だろう。しかし、現実にはどうだろうな」

「現実には？ 何を言ってるんだ？」

「現在の老人と子供の比率を知っているかってことだ。今はまだそれほどじゃないが、あの子供が俺たちくらいになるころにはあの子供は一人で老人を十人くらい養うことになるんだぜ。つまり現実にはあの爺さんが子供の背におぶさってるってことさ」

やつと藤井が何を言おうとしているのかがわかった。

「だから「特権者優遇計画」は許されるって言うのか？」

「必要悪って言葉を知っているだろう。例えば――」

「あんたの例え話しはたくさんだ！」

「そう言うなよ。俺は君よりも計画についても世界の現状についても知ってる。アメリカじゃあ人殺しをゲームとして楽しむことが法律で許されるってことを知ってるか？ いかに歩き続けていられるかそれがゲームの内容だ。健全でないのは歩けなくなった時に頭を一発吹き飛ばされるってことだ。生き残れるのはただ一人、それ以外は皆殺される。まだ企画段階だがすでに何十人もの子供たちがそのゲームへの参加を望んでいる。そいつをどう思う？」

「そいつらは狂ってるんだ！ それとも罰ゲームの中身を嘘だと思っているかのどちらかなんだ」

「そうだろうね。日本人の多くが「特権者優遇計画」が実際に行われていることを信じないようにね。いずれにしても日本の政策なんてかわいいもんだ」

「つまりあんたは俺に『平気で人殺しをやったのける』と言ってるのか？」

「そうは言っていないよ。ただ俺たちマスコミが動かない理由を教

えてあげただけだ」

（同じことだろう）

克行は暗い気持ちで思った。このまま「特権者優遇計画」が始まればきつとそういうことになるだろうと予想していた。それは自分でも認めたくない予想だった。

「いずれにしてもあんたは動いてはくれないわけだ」

克行は藤井に麻美のことを話すのをやめた。藤井は麻美のことくらいで考えを変えるようなことはしない。あくまで客観的な見方が出来る男だ。

「悪いけどね」

そして藤井はゆっくりと立ち上がった。「力になれずに申し訳ないが、恨まないでくれよ。君とはいつまでも仲間でいたいんだ」

「大丈夫、断わられた腹癒せにあんたをターゲットにしたりはしないよ」

「その点は信頼しているよ。それにいくら君が俺を狙おうとしても、あいにく俺は今夜にはハワイ行きの飛行機に乗っている。そして帰ってくるのは正月あけだ」

「またガキ相手に遊んでくるのかい？」

「そうだ。俺だってあんなガキどもをカメラ持って追い回すのは嫌だが、それでも奴らは金になるんでね」

「がんばってくれ」

克行は精一杯笑顔をつくってみせたが、それはあまりうまくはいかなかった。藤井は来たときと同じように軽く右手をあげて去って行った。

藤井が立ち去ったあと、視線は無意識のうちにさっきの老人の姿を捜していたが、すでに家路についたのか見つけることは出来なかった。

それでも俺は認めたくない。いや、認めるわけにはいかないと思った。克行はベンチに座り込んだまま、麻美に今夜どう伝えたらいいものかと頭を悩ませていた。

死のクリスマスイブ・10

十

緊張感で手の平が汗をかいている。

一秒、また一秒と時間が近づいている。

「どうしたの？ この前から克行変だよ」

心を探るような眼差しで麻美が不思議そうに克行を眺めている。

だが、その目は決して克行の心の全てを見抜いてはいない。ほんの少し克行の様子がいつもと違うことに気づいているにすぎない。それは克行にとつて救いでもあり、苦痛でもあった。

克行はそんな麻美の言葉にまた時計を振り返った。

十一時三十二分。あと二十八分で特権者優遇計画が始まる。

話さなければいけない。

もともとそのつもりで今夜麻美の部屋を訪れたのだ。いずれは話さなければいけないと思いつつ一週間が過ぎてしまった。藤井を通じてマスコミを動かし、「特権者優遇計画」の問題点を世間に訴えかけることで麻美を救うことが出来るのではないかと考えたが、その考えは打ち破られた。

彼女に伝えなければならぬ。

——このリストの中身についての口外は一切禁止します。もしもそれを破った時にはその人にはしかるべきペナルティが与えられることとなります。

ペナルティ？ 今更いたいどんなペナルティがあるっていうんだ？

「やっぱり今日の克行、どっか変よ。どこか上の空で………いったい何を考えてるの？」

克行も明日仕事があるんでしょ。いくら日曜だからって、いつも日曜の夜は早めに帰っちゃうじゃないの。それに先週だって、連

絡してもぜんぜんいないんだもの。どうしたの？」

麻美はベッドに腰かけ、黙って座っている克行をじっと見つめた。答えられるはずがなかった。麻美と言葉を交わすだけで涼子とのことがばれそうな気がして電話にすら出ようとしなかったのだ。ベッドわきのテーブルの上に読みかけの手紙が広げてある。

「手紙……誰から？」

つい話題をそらした。

「これ？ 父さんからよ。この前、届いたの。ちょっと思い出して読んでただけ」

麻美はそう言って即座に手紙を片付けた。そういえば麻美の父親は国家公務員という話を聞いたことがある。麻美も少しは特権者優遇計画について知っているのだろうか。

克行は再び言葉を搜すようにぐるりと部屋を見回した。

でっぷりと肥えた黒猫のルシファーは克行を見るなりいつものようにベッドの下へ潜り込み、それでもその青い目でじっと克行を観察している。まるでいち早く克行の心のなかを察しているようで克行はぞっとした。

「麻美……」

やっと克行は口を開いた。

「何？」

麻美が身を乗り出した。

「明日からのこと知ってるだろ」

「明日？」

一瞬、麻美の顔が硬張る。彼女も心のどこかに特権者優遇計画のことがひっかかっていたのだろうか。

「特権者優遇計画のこと」

「……あのこと……でも、それがどうかしたの？ 私たちにはいっさい関係のない話よ」

「そういうわけにいかなくなった。実は……今年、俺も特権者として選ばれたんだ」

克行の言葉にさすがに麻美の顔が白くすつと透き通っていく。目は何が起こったのか見定めるかのようにきよきよと動き、薄い紅い唇は微かに震え、その場を補う言葉を搜している。

その麻美の仕種から彼女がいかに驚いたか克行には想像出来た。そして、その彼女の驚きは克行の予想をはるかに上回るものでかえって克行はどうしていいかわからずただ、じつと麻美を見守った。しばらくの間、二人とも口を開こうとはしなかった。

通りを横切る車のエンジン音が手に取るように聞こえてくる。

十一時四十三分。あと十七分。

やつと麻美が口を開いた。

「なぜ……？　なんで克行が……？　どうしてなの？」

「わからない……」

「でも——！」

「いったい何がどうなってるのか俺にもわからないんだ。先週の日曜の朝、突然通知が届いたんだ」

「先週の日曜？　それじゃ、この前会った時に？」

「そう、あの朝だ」

「なんで言ってくれなかったの？」

「責めるような目で麻美が言った。」

「こんなこと誰にも言いたくなかった。当然だろう。特権者なんて言い方をしてるけど、実際には人殺しのことだ。黙っているつもりだった」

「克行も……人を殺すの？　特権者選ばれたって言っても、どうしても人を殺さなきゃいけないってことないはずよ。人を殺さなくても済むんでしょ」

哀願するような麻美の言葉に克行は胸が痛くなるような感じがした。やはりもう一つのこと話さなきゃいけない。そうすることが麻美のためだ。

「そりゃ、そうだけど。噂じゃ、権利を破棄すると来年は俺が特命者リストに載ることになるそうじゃないか」

「そんなの嘘よ！　お願い、計画のことなんか忘れて！」

「それだけじゃないんだ！」

「それだけじゃない？　どういうこと？　まだ何かあるの？」

麻美の手がぎゅっときつくシーツを握りしめる。

「……俺の持つ特命者リストのなかに……その……」

「何なの？」

「君の……麻美の名前があるんだ」

「……私の……名前？　克行のリストのなかに？」

さつきより麻美の驚きは大きくはないように克行には見えた。ただきつく下唇を噛み、鋭い視線で克行を見つめている。

「麻美……」

「それで……克行はどうするの？」

「え？」

「私を……殺すの？　特権者優遇計画が始まるまであと——十二分、そのために今夜私のところにやって来たの？　もう拳銃は持っているの？」

克行から視線をそらすことなく麻美は挑戦するような口ぶりで言った。

「——まさか！　俺がなんで麻美を殺さなきゃいけないんだ！」

思わず克行は立ち上がり怒鳴った。

「俺はおまえのことを愛してるんだ。俺がおまえのことを殺すわけないだろう！」

「克行……」

「俺はおまえのことを守りたいんだ。ほら、この通りほかのおまえを狙う奴らのリストだってある。こいつらを殺してでもおまえを守ってやる！」

克行はポケットのなかから殺人者リストを取り出した。

「リスト？」

「ああ、こいつだ。ここに載っている俺を含めた6人が麻美の名前に入ったリストを持っている」

リストを麻美に手渡すと彼女は驚いたようにリストと克行を見比べた。

「どうして？ どうして克行がこんなものを持っているの？」

「……市役所に勤めてる友人が調べてくれたんだ」

涼子の名前を口に出すのは避けた。先日の夜のことが思い出され、克行は心のなかで小さく麻美に詫びた。

「友達？……その人、計画に関わっているの？」

「去年、実行委員になったらしい。けど、今年は一切関わっていない。月曜に特権者全員を集めての説明会があったんだが、その帰りに偶然会って、事情を話すと調べてくれたんだ。そいつが言うには今回の特権者計画にミスがあったんだらうって。だから、麻美の名前がリストに載ったんだらう」

「ミス？」

「ああ、まったく馬鹿げてる。そんな市役所のミスなんかで人の命がむざむざ危険にさらされるんだからな！」

克行はうろろと部屋を歩き回りいらだちを押さえようとした。

「克行……」

少しの間、麻美はリストをじつと見つめて何やら考えこんでいたが、やがて克行を見つめつぶやいた。

「え？」

「克行はどうするつもりなの？」

克行にはその麻美の姿が意外にも冷静に映っていた。

「だから……おまえを——」

「私を守るって言ったけど、いったいどうやって私を守ってくれるの？」

「……」

麻美の言葉に克行は言葉を詰まらせた。ポケットに忍ばせてある拳銃が一瞬鉄の固まりのように重たくなる。

「特権者優遇計画が終わるまで一日二十四時間ずっと私についててくれるの？」

克行は再び麻美の前に座り込んだ。

「いや……実際に計画による殺人が一番多いのはクリスマス・イブからクリスマスにかけての二日間らしい。だから、その二日間さえ外出しないようにしていればおそらくそれほど危険なことはないだろう」

「でも完全に安全じゃないわ」

その通りだと克行は思った。現に立花のように特権者優遇計画に生きがいを感じているような奴もいる。

「ああ……」

「克行……」

じつと麻美の目が克行の目を見つめる。どこか不安気でその不安が克行に何かを訴えている。麻美がその瞳の奥に何を考えているのか、それを想像するの怖かった。

十一時五十四分。

「心配するな、麻美のことは俺が守ってやる。誰にもおまえのことを殺させたりしない。誰にもだ……」

ぎゅっと麻美の体を引き寄せ力一杯抱きしめる。涼子とはどこか違うぬくもりが伝わってくる。

そうだ、俺が愛しているのは涼子じゃない。麻美なんだ。

克行は改めて麻美への愛を認識した。そして、彼女のことを命をかけても守ろうと決意していた。その克行の決意をはっきり受け止めたのか麻美は克行の腕の中で大きく頷いた。

時計の長針はついに短針に追いついた。

今、特権者優遇計画が始まる。

死のクリスマスイブ・11

十一

十二月 十八日 (月)

オフィスは今日も変わりなく動いている。

あの日以来、部長の桜川から特権者優遇計画について尋ねられることもない。おそらくこの社内にも克行の知らない特権者や特命者がいることだろう。だが、誰一人として決してそんなことを口にしようにしない。皆、特権者優遇計画のことなど忘れてしまっているのだろうか、それとも密かに探りあっているのかもしれない。克行はそのことに不気味な怖さを感じていた。

けれど今、自分に直接的に関係しない者たちに関わっている暇はない。今の克行にはどこで誰が殺されようとまったく無視することの出来る自信があつた。

克行はこれからやるべきこと、言うべきことを頭のなかで繰り返した。

(やるしかない！)

何度も自分自身に言い聞かせたことだ。

そのことは特命者リストに麻美の名を見たときからたえず頭のなかにあつた。だが、いつもそれは現実離れしていることのように思えてしかたなかった。しかし、昨夜麻美と会ったことで克行の心も一つに決まった。

特権者を殺す。麻美の名の入った特命者リストを持つ特権者たちを殺す。それが麻美を守る最も有効な手段なのだ、という考えが強い決意として克行の心のなかにはつきりと表示されていた。

克行は電話を自分の机に寄せると、外線発信のボタンを押した。

慎重深く相手先の電話番号をダイヤルしてゆく。

——はい、I M Mでございます。

いつもの女子事務員の声が電話口から聞こえてくる。

「K C Sの者ですが、いつもお世話になっております。おそれいりますがシステム課長の波川さんいらっしゃいますでしょうか？」

——少々、お待ちください。

女子事務員の声が跡絶え、電子音が音楽を奏で始めた。克行はじつと汗ばむ手で受話器を握りしめながら電話口に波川が出てくるのを待った。やがて、ぷつりと電子音が跡絶えた。

——はい、お電話変わりました。

波川の声だ。

「もしもし、風間です」

——なんでしょう。

「今度のシステムのことでちょっとお話したいことがあるんですが、今週時間ありますでしょうか？」

声がうわずるのを押さえるように克行は事務的に仕事の話を切り出した。

——今週ですか？ 何か問題でも起きたんでしょうか？

そう、大きな問題が起きている。しかし、それは仕事じゃない。それを解決するためには何としてもあんたに会わなきゃならないんだ。

「いえ、問題というほどのことでもないんですが、システムの概要がまとまりましたので、それをチェックしていただきたいと思いますして……」

——そういうことでしたら、風間さんにお任せしますよ。私が見てもねえ。そうだ、うちの菅原君、彼ならあなたも知っているし、彼とではどうだろうか？

波川ののりくらりとした答えが帰ってくる。いつもそうなのだ。いつもシステム開発が始まる時にはそう言って他人任せにし、いざシステムが出来上がる頃にいくつも難題を持ちこむのだ。だが今度は逃がすわけにはいかない。今度のミーティングはこれまでのよう

に代理の人間では役に立たない。波川自身でなければならぬのだ。
「いえ、今回だけは波川さんでないと…… K I N I C の坂本係長も出席していただくようお願いしてますので」

もちろんまだ坂本には連絡はいれていない。だが、そう言うことによつて波川に逃げることの出来ないものだという気持ちを持たせることは出来る。それに、坂本にもこれから連絡して必ず出席させるつもりなのだ。

波川と坂本、彼ら二人を除いては今度の打合せは何の意味も持たない。そうだ、あくまで二人同時でなければならぬ。

——坂本さんか……それじゃ、行かないとねえ。

「いつがいいでしょうか？　なるべく早いほうがこちらとしては都合がいいんですが」

そうだ、殺るならば早いほうがいい。それだけ麻美の危険が少なくなる。

——そうですね。明後日、水曜の午後ならお会い出来ますけど。

二日後、その期間がもどかかった。

だが、涼子が持つてきてくれたこれまでの「特権者優遇計画」の統計によれば最も殺人が行なわれるのは最終日であるクリスマスイブ。平日に行なわれる可能性は極めて低かった。

「水曜ですか。わかりました。それでは水曜の午後そちらにお伺いいたします」

——よろしく。

「よろしくお願いいたします。それでは失礼いたします」

立て続けに言葉を発し、克行は電話を切った。会う日が決まった今、いつまでも長話をしている必要はなかった。

「どうかしたのか？」

その声にふと顔をあげると不思議そうに克行を見つめている西崎の目とあった。

「いや……なぜ？」

「だって、今回のシステムは始まったばかりで設計書だってまだ完

全にはまとまっていけないじゃないか。あんなものを見せるために波川さん呼び出したんじゃ、かえって文句言われるんじゃないのか？」

西崎はパソコンを叩く手を休め克行に尋ねた。

「設計書がまとまってからじゃかえって遅いだろう。概要はだいたいままとまってる。あれだけ出来てれば叩き台にはなる」

克行は心を読まれないように注意しながら反論した。

「そりゃ、そうだけど……おまえ、いつもだったらもう少しまとまってから打合せに入るだろう。それにあんまり上の人間じゃかえって開発の邪魔になるって坂本さんなんてむしろ避けようとしてたじゃないか。何で今度に限って——」

「少しやり方を変えてみただけだ。それよりおまえに頼んだ資料、大丈夫なんだろうな。明日までには終わらせてくれよ」

西崎に追求されるのを恐れ克行は冷たく突き放した。

「藪蛇だったな」

西崎はそんな克行の気持ちを知るはずもなく、明るく笑い飛ばすと再びパソコンのキーボードを叩き始めた。

（そうだ、藪蛇だ。おまえは黙って見てればいい。水曜を過ぎればおまえも現実を知ることが出来る）

現実。まだ西崎は自分の名前が特命者リストに入っていることを知らないのだろうと克行は想像した。知っていればそうやって笑っていられるはずがないのだ。

「殺人罪」

確か西崎の特命者になった理由にはそう書かれていた。

（いったいこいつが誰を殺したというんだろう？）

無言でパソコンに向かう西崎を克行はぼんやりと見つめた。

西崎とは入社した頃から同じ課でずっと働いてきた。仕事の能力はもとより、プライベートのことかなり西崎については知っているつもりだった。だが、殺人を犯すような危険な一面だけはこれまで見たことがない。いつも温和でどちらかというとトラブルをまと

める部類の人間だと思っている。その西崎がこともあるうに殺人罪で特命者リストに名前を載せられている。

（これもミスだろうか？）

克行は自分自身に問いかけていた。出来ることなら西崎のことも救ってやりたかった。だが……

「西崎」

克行はふと西崎に声をかけた。

「なんだ？」

「おまえ、人を殺したことあるか？」

馬鹿な質問だと思った。そんなことを聞いて何になるのかと自分で自分をあざ笑った。けれど、実際に聞いて見たかった。「殺していない」という答えを聞きたかった。

西崎はそんな克行をあっけにとられたようにぼかんとして見つめていたが、やがて、にわかに笑い出した。しかし、その笑いが西崎の顔から遠ざかった時、西崎の顔からは笑いは消え去り変わりにこれまでに見たこともなかった悲しみに包まれたような顔が残った。

「何でそんなこと聞くんのだ？ おまえ、何か知ってたのか？」

「え？」

その西崎の答えに克行はうろたえた。

「誰かに聞いたのか？ 噂なんて変な風に飛び回るからな」

西崎はそう言ってから回りを見渡した。幸い近くの席には誰もいない。時折離れたところにあるプリンターの音がフロアに響くのがやけに大きく聞こえる。社員の多くは客先に出払っているのだ。

「噂？」

自然、克行の声も小さくなる。

「噂を聞いたんだろ。俺と彼女のこと」

「彼女って？」

「おまえも知ってたろう、笹野加代子と俺が付き合ってたってこと」

「笹野加代子？ ああ、あの受付の子か」

以前、克行と西崎が一緒にしていた仕事先の受付嬢を克行は思い

出した。そういえばその後、西崎と彼女がつき合っているというのを西崎本人から聞いたことを思い出した。

「そう、ちょうど去年の今頃かな？ あの時からつき合い始めたんだ」

「彼女がどうかしたのか？」

「死んだんだよ」

「死んだ？ いつ？」

「今年の八月」

「八月？ それじゃ——」

今年の八月。その頃克行は自社に来ることは少なく、ずっと客先で仕事をしており、西崎ともほとんど会社の誰とも会ってはいなかった。ただ、西崎が車で事故を起こしたということだけは噂で聞いたことがあった。

「そうだ、あの時の事故でだ」

「けど、おまえはたいしてケガもなかったって聞いたぞ」

「俺はな。だいたい事故の原因がスピードの出しすぎとか、酔っ払い運転とかそんなものじゃなかったんだ。信号待ちをしているところに前に止まってたトラックの後ろに積んであった鉄材が転がり落ちてきたんだ。しかも、運悪く彼女の座っている助手席めがけ突っ込んできたんだ。俺はガラスの破片をあびただけ。ところが彼女は即死だった」

「そうだったのか……」

「ただ、彼女の親がうるさくてな。知らなかったか？ 彼女、市会議員の娘だったんだ。しかも一人娘とくれば殺されたと思うのも無理はないけどな」

「議員の娘？」

「ああ、俺はあんまり政治家なんて知らないけど知ってるやつらに言わせりやかなり有名ならしいぜ。おそらくそのへんから俺が殺したって噂が出たんだろう」

西崎は暗い視線をずっと落とした。

「悪かった……」

克行もまた何と書いていいかわからずに言葉を切った。
克行の心のなかに新たな思いが広がりとつあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6197z/>

死のクリスマスイブ

2011年12月26日11時57分発行